

《資 料》

経済史家ヨーゼフ・クーリッシェル

—業績、生涯、家族—

松 尾 展 成

- (I) クーリッシエルの著書『一般経済史』
- (II) ヨーゼフの研究業績
- (III) ヨーゼフの生涯
- (IV) ヨーゼフの家族
 - (A)曾祖父モーゼス (B)大おじロイベン (C)父ミヒャエル (D)弟ユージン (E)弟アレクサンダー
- (V) 引用文献

(I) クーリッシエルの著書『一般経済史』

ヨーゼフ・クーリッシェルは、1928-29年にミュンヘンとベルリンで出版されたドイツ語著書、『中世・近世一般経済史』、2巻によって、経済史家として著名である。この書物は第1に大著である。2冊を合わせて900ページを超える。しかも、多くの脚注に加えて、本文でも小活字の部分が相当の分量を占めている。この書物は第2に、非常にすぐれた研究書であり、概説書である。「もろもろの困難を克服して、みごとにヨーロッパ経済史の全貌把握をなしとげた、数すくない著作中の最も卓越した名著」である。

「もろもろの困難」とは、次の事情である。第1に、「ヨーロッパにおける経済史研究の業績をみるに、各国別や各時代別あるいは事項別の概説書には、すぐれたもの、あるいは特色あるものもすくなくないが、ヨーロッパ全体の、しかも古ゲルマン時代から中世および近世を通じての均衡のとれた概説書となると、多数の専門家による浩瀚な編纂ものは別として、一人の著者でこれをなしとげたものは、きわめてまれである」。第2に、「一般に経済史の叙述は、政治史や文化史のそれとはちがって、史実の積みかさねから歴史的画像を目にみえるように具体的に描き出すという操作の最も困難な性格をもっている。すなわち、その史料は、地域によって無数のこまかい事実を立証するかと思えば、まったく史料の欠如した時代があり、他方で、発展段階説その他の理論的総括の要請がはたらくため、経済史の概説を、その大きな流れを見うしなわないで、しかも各時代の歴史的画像に必要にして十分な肉づけをおこなうとなると、これには並々ならぬ博識と力量と努力が必要である」(東洋経済新報社版邦訳書第1巻への監修者、増田四郎教授の序言)。

あるいは、「これだけ精緻な事実関係を盛り、その上に経済史に関する問題意識とその研究史を展開している、充実した一冊の書物は、恐らく他に類例を見ないであろう」。「概説的な叙述と問題史の展開、この二つをただ一人の学究が見事に果たしたこの大著は、それ自身奇跡に近い偉業であり、公刊とともに古典に列せられたの

も当然のこと」である（同上邦訳書第2巻への監修者、松田智雄教授の序言）。

私は諸田實教授に強く勧められて、合計5人による一般経済史第2巻の翻訳作業に参加した。翻訳作業を進めるに当たって、非常に狭い分野に関心と知識を持つにすぎない私は、多くの知人・友人の教示に助けられた。とりわけ有馬達郎教授はロシア語版『西ヨーロッパ経済史』の関連個所と突き合わせて、ドイツ語版の表現に関する私の疑問に回答された。諸田教授が全力を傾注され、すべての訳稿を補筆されたために、第2巻の邦訳書は分担決定から8年余りに2冊本として刊行された。これでもってクーリッセルと私との直接の縁は切れた。しかしながら、これほどの名著を書いた著者の経歴が、我が国でほとんど知られていないことは、瑣末実証を事とする私には、気がかりであった。

そこで私は彼の業績と経歴を調査しはじめた。こまごました調査を行なう過程で、私は日本人研究者から、そして、ドイツ、米国、ロシアなどの機関から、懇切な教示を受け、多くの資料を与えられた。回答をとくにしばしば得たのは、バイエルン州立図書館、チュービンゲン大学図書館、ニューヨーク公共図書館などである。とりわけワシントン大学スザラロー図書館（シアトル）のジョイス・バーナム夫人は数多くの懇切な手紙と資料によって、欧米の図書館参考部門がもつ、驚嘆すべき底力を示された。レニングラート大学図書館、ロシア国立図書館（モスクワ）、国立レニングラート図書館からの回答は、クーリッセルの著書目録をほぼ完成させてくれた。レニングラート大学図書館と国立レニングラート文書館によって、彼の経歴についての疑問はかなり解消された。ロシア語の回答と資料の翻訳（ロシア文字のローマ字化を含む）は太田仁樹教授に依頼した。有馬達郎教授は本稿に関してもクーリッセルの著作（論文）目録を補充してくださった。フランス語資料の翻訳は主として松尾信之氏に依頼し、さらに森本芳樹教授の助言を得た。ともかく、本稿についての本格的調査は、バーナム夫人の教示がなければ、開始されえなかつたし、太田教授のご厚意がなければ、本稿は執筆されえなかつた。

ところで、調査は最後まで進まなかつた。そこで私は調査結果を私は長らく放置していた。しかし、このまま放置することは、教示と資料を与えられた研究者と機関に対して、余りにも無責任である、と思い直して、原稿を書き改め、発表することにした。本稿は大小さまざまな誤りを含むであろう。それらは、言うまでもなく私だけに帰せられるべきものである。

ここで4点を予め記しておきたい。第1. 問題のヨーゼフ・クーリッセルはロシア人としてはヨシフ・ミハイロヴィチ・クリシエールであるが、以下においては、姓を省略し、ドイツ式の名ヨーゼフだけで表現することにする。彼の父祖・兄弟も同様である。ただし、米国で没した弟オイゲンだけは、英語式にユージンとする。第2. ヨーゼフのドイツ語著書、『中世・近世一般経済史』は一般経済史と略称する。第3. ヨーゼフの長年の居住地は18世紀初めから1914年までサンクト・ペテルブルク、1924年までペテログラート、それ以後レニングラートと呼ばれ、近年のソヴィエト連邦崩壊後ふたたびサンクト・ペテルブルクとなっている。以下では、乱暴ながら、晩年のヨーゼフに合わせて、原則としてすべてレニングラートと記すことにする。同地所在の組織（大学など）の名称も同様である。第4. 本稿第3－第4節において外国語の図書・論文・雑誌は邦訳で示される。その原題は第5節の引用文献一覧(C)を参照されたい。

さて、ヨーゼフの一般経済史は英米独仏などの数多くの学術雑誌において書評の対象となった。以下は、ワシントン大学バーナム夫人の直接の教示によるもの、および、同夫人の教示に基づいて『雑誌掲載書評集成』で検索したものいくつかである。（ ）内は書評者を示している。それぞれの言語群で刊行の年代順に配列した。

第1巻と第2巻の書評が同じ雑誌の異なる巻・号に掲載された場合には、一括してある。書評内容の紹介を省略したのも少なくない。

(A) ドイツ語

(1) *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, Bd. 21, Stuttgart 1928, S. 449–453(Fedor Schneider); Bd. 24, 1931, S. 312–318(F. Schneider) (第1巻について、読者は「広範な領域での豊富な啓発」によって著者に感謝すべきである。イタリアの事実がほとんど顧慮されない、などの、評者の批判によって、著者の成果全体が引き下げられることはない。第2巻は、資料と文献についての広範な知識に基づいており、個別問題を深化させるのに適している。無視されていた諸外国との比較が、本書によってドイツの経済史家に非常に容易にされた)

(2) *Deutsche Literatur-Zeitung*, N. F., Bd. 6, Berlin 1929, H. 47, Sp. 2269–2271 (Fritz Rörig) (第1巻では新しい学説が考慮されていない。第2巻は、類書が乏しいので、貴重である)

(3) *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, Bd. 86, Tübingen 1929, S. 405–409 (Alfons Dopsch); Bd. 88, 1930, S. 406–412 (A. Dopsch) (第1巻は、旧学説に依拠するところが多い。しかし、本書は全体を概観することに成功した。第2巻について、オーストリアの事実があまり検討されていない。個別文献が山積している現在では、近世一般経済史を叙述できる歴史家は、きわめて少ない。その最初の試みである本書は成功している)

(4) *Forschungen zur brandenburgischen und preußischen Geschichte*, Bd. 42, München / Berlin 1929, S. 151–153(H. Rachel)

(5) *Allgemeine österreichische Chemiker- und Techniker-Zeitung*, Wien 1929, Nr. 18, S. 132 (Hans Urban)

(6) *Nationalwirtschaft*, Bd. 3, Berlin 1929, S. 569 (Klaus Thiede)

(7) *Numismatische Zeitschrift*, Bd. 62, Wien 1929, S. 140–141 (August von Loehr)

(8) *Prager juristische Zeitschrift*, Bd. 9, Reichenberg 1929, S. 671–672 (Guido Kisch)

(9) *Die Quelle. Sonntag-Beiblatt der Reichspost für Literatur, Heimatkunde und Kultur*, Wien 1929, Nr. 172, S. 17–18 (Arnold Winkler)

(10) *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 3. Folge, Bd. 77, Jena 1930, S. 776–777 (Constantin von Dietze) (個々の問題では躊躇するところが多いけれども、全体として見れば、本書は、優れた入門書であり、見渡し難い対象を望みどおりに総括したものであり、有用な参考書である)

(11) *Berichte über Landwirtschaft*, N. F., Bd. 13, Berlin 1930, S. 163–165 (Kurt Ritter)

(12) *Historische Zeitschrift*, Bd. 143, München 1931, S. 82–85 (Gustav Aubin) (本書の特色はその理論的な態度よりも細部にある。著者は諸文献をひろく集め、慎重に、むしろ保守的に判断し、明快に叙述する。本書はすべての人にとって、文献と現在の学説を知るための確実な手引きであり、同時に、西ヨーロッパの経済発展の大筋をすでに知っている人にとっては、価値の高い、素材の宝庫である)

(13) *Archiv für Rechts- und Wirtschaftsphilosophie*, Bd. 25, Berlin 1931, S. 135–137 (Ernst Schultze)

(14) *Literarischer Handweiser. Kritische Monatschrift*, Bd. 67, Freiburg / B. 1931, S. 488–489 (Max Weber)

(15) *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 67, Tübingen 1932, S. 382–384 (Richard Henry Tawney) (著者の個々の見解は確かに問題にされうる。しかし、全体として見ると、本書は、卓越した著作である。最新の研究に通暁した一人の学者による、西ヨーロッパの経済発展の叙述として、長く凌駕されることはないであろう)

(16) *Archiv für Kulturgeschichte*, Bd. 25, Leipzig / Berlin 1935, S. 338–339(Hans Wagner)

(B) 英語

(17) *Economic Journal*, Vol. 39, London 1929, pp. 616–618 (Joseph Lemberger) (論文の専門化の潮流は止まない。長期に及ぶ経済史を分かりやすく報告したものは稀である。著者は価値ある仕事をなしとげた。著者は経済政策あるいは政治・憲法の変化の経済的結果を記述することに満足せず、経済生活の歴史を書こうとした。対立する理論を評価する場合に、著者は常に用心深く、保守的である。故G[ゲオルク・]フォン・ベーローの影響が大きい)

(18) *American Historical Review*, Vol. 34, New York 1929, pp. 301–303 (Abbot Payson Usher); pp. 807–809 (A. P. Usher) (第1巻は内容と方法において顕著な成果であり、ドイツ歴史学派の最良のものである。いくつかの問題では旧学説に依拠しており、地理的にも西北ヨーロッパに限定されている。第2巻は、最近30年間に書かれた欧州経済史の中で、最も包括的なものである。著者は伝統的学説を好むが、個別論文の成果を摂取して、あの学説を修正している)

(19) *Economic History Review*, Vol. 2, London 1930, pp. 360–361 (Michael M. Postan) (第1巻は中世経済史の教科書として完璧である。しかし、本書には、長所に伴う短所がある。教科書は、確立された知識全体を解説せねばならない。それはまた最新のものでなければならない。現代の中世史[教科書]においては不幸にも、この二つの目的はほとんど達成しがたい。中世の経済発展についての、20年ほど前には強固であった考え方は、最近の批判によって破壊された。これらの批判は旧学説の首尾一貫性を破壊したが、何か新しいものをまだ作り上げていない。このような状況の下で著者は妥協の道を取り、確立した学説の中に批判の最新成果を含ませた)

(20) *History. The Quarterly Journal of the Historical Association*, N. S., Vol. 15, London 1930, pp. 216–218 (J[ames] F[rederick] Rees) (本書は、一般経済史の参考文献目録に含めるのに、全く相応しい。著者は見事な書物を書き上げた)

(21) *Journal of Political Economy*, Vol. XLI, Chicago 1933, pp. 379–391 (Max S. Handman) (本書は、西ヨーロッパの経済生活に関わる重要な事実を把握するための、最良の案内書である)

(C) フランス語

(22) *Revue historique*, T. 158, Paris 1928, p. 301 (Henri Sée); T. 160, 1929, pp. 381–382 (Marc Bloch); T. 161, 1929, pp. 336–337 (H. Sée) (第1巻について。資料は広範かつ詳細であり、記述は非常に明晰である。本書はすべての歴史家にとって有益である。以上セー。本書は非常な貢献である。すべての論争点に関して、諸理論が正確・公平に要約され、結論は良識的に示されている。文献目録の配列法が必ずしも明確でない。以上ブロック。第2巻は非常に貴重な作品であり、情報の宝庫である。歴史家は常にこれを利用せねばならない)

(23) *Revue de l'Institut de Sociologie*, T. 8, Bruxelles 1928, p. 659; T. 9, 1929, p. 135 [無署名]。

(24) *Revue Bénédicte*, T. 41, Denée 1929, p. 391 (D. Ph. Schmitz) (第1巻について、優れた文献目録、構成の簡潔さ、説明の明快さと諸学説の公平な紹介が指摘されうる。教会と修道院の歴史にとっても本書は有益である)

(25) *Annales d'histoire économique et sociale*, T. 1, Paris 1929, pp. 252–253 (Marc Bloch); T. 2, 1930, pp. 132–133 (M. Bloch) (第1巻は大変充実しており、詳細である。資料の確実な知見によって、すべての論争点を判断している。巧みに選択された、大量の事実と最新の参考文献目録によって、本書は中世史家と経済史家の必携書である。第2巻も、入念に集められ、非常に巧みに選択され、完璧なまでに明快に叙述された、情報の集積である。最も新しい時期を扱う第4部が、分量不足である。第3部は3世紀を同じ袋に入れているが、その最後の18世紀は大変動の時代であった。また、イギリスとフランスの文献の参照が少ない)

(26) *Revue d'histoire moderne*, T. 4, Paris 1929, p. 363 (Henri Sée) (第2巻は、歴史家が常に参照すべき書物であり、匹敵するものがない。参考資料は大変すぐれており、最新である)

(27) *Revue belge de philologie et d'histoire*, T. 8, No. 1, Paris / Bruxelles 1929, pp. 243–245 (Henri Pirenne) (本書は、よく整理された事実の宝庫であり、文献目録は非常に行き届いている。これは実質的で実用的で便利である。経済史学の現状を示すことに、著者は成功した。しかし、著者は古代ローマ帝国の遺産を無視し、ビザンティン帝国もロシアもアメリカも黙殺している)

(28) *Revue critique d'histoire et de littérature*, T. 96, Paris 1929, p. 512 (Henri Hauser) (この2巻本は欧州経済史に関して現時点で最も完全で、最も詳細である)

(D) その他

(29) *Archivio Storico Italiano*, Serie 7, Vol. 9, Firenze 1928, p. 326 (R. C.); Serie 7, Vol. 11, 1929, pp. 342–344 (R. C.)

(30) *Annali di Economia*, Vol. 6, Milano 1928, pp. 80–81; Vol. 7, 1929, pp. 36–37 [無署名].

(31) *Giornale degli economisti e rivista di statistica*, Vol. 44, Milano 1929, pp. 34–35 (Enrico Besta); Vol. 45, 1930, p. 71 (E. Besta)

(32) *Scientia*, Vol. 47, Milano 1929, pp. 211–213 (C[amillo] Supino) [ページ数はシュトゥットガルト・ヴェルテンベルク州立図書館]

(33) *Economia*, Anno 9, N. S., Vol. 7, Roma 1931, pp. 113–115 (Stefano Somogyi)

(34) *Kwartalnik historyczny*, Vol. 46/I, Lwow 1932, pp. 435–445 (Natalia Gasiorowska)

(35) *Szazadok*, Vol. 65, Budapest 1932, pp. 290–310 (P. Vaczy)

以上のように本書は刊行直後に数多くの、好意的な書評に恵まれた。そればかりではない。第2に、本書は第二次大戦後に、内容の変更なしに、覆刻された。復刻版はその後も版を重ねている(1988年の第6版は2004年9月現在、書店で入手可能である)。第3に、本書は第二次大戦後に、イタリア語、ポーランド語(ロシア語版『西ヨーロッパ経済史』の翻訳はすでにあつた)および日本語(第1巻本文の翻訳はすでにあつた)に翻訳された。

(II) ヨーゼフの研究業績

私はヨーゼフの研究業績を調査してみた。その結果は次のとおりである。著書(A)は初版の年代順に配列し、数年にわたる出版物は、第1部(巻)の年によって配列した。版を重ねた場合、書名がいくらか変更されていても、初版と最終版のみを、初版の個所に示した。出版社名と叢書名は省略した。著書はすべて巻で数えた。著書のページ数は本文だけのそれであり、序文や後書きなどの別立てページ数は除いた。雑誌論文(B)について雑誌の編集者と出版地は省略した。ロシア語文献は主としてレニングラート大学図書館からの、一部は国立レーニン図書館と国立レニングラート図書館からの回答に依拠した。[]は、有馬達郎教授の教示を示す場合と、私の調査の典拠を示す場合を含む。ロシア語以外の文献の題目、雑誌名などには邦訳を付けなかった。

(A) 著書

- (1) *Ocherki po istorii tamozhennoi politiki*. 『関税政策史概要』, レニングラート, 1903年, 51p.
- (2) *Khlebnye poshliny i ikh vliianie na narodnoe khoziaistvo : Pervyi period agrarnogo proteksionizma do 60-kh gg.* 『穀物関税と国民経済に対するその影響. 60年代までの農業保護主義の最初の時期』, レニングラート, 1904年, 80p.
- (3) *Ocherki iz istorii form promyshlennosti v Zapadnoi Evrope s XIII do XVIII stolitiia v sviazi s izucheniem voprosa o kharaktere pr ibyli v promyshlennosti etogo perioda*. 『13-18世紀西ヨーロッパ工業形態史概要. この時期の工業における利子の性格についての研究に関連して』, レニングラート, 1906年, 290p.
- (4) *Evolutsiia pribyli s kapitala v sviazi s razvitiem promyshlennosti i trgovli v Zapadnoi Evrope*, T. 1-2. 『西ヨーロッパにおける商工業の発展に関連した資本利子の発達』, 1-2巻, レニングラート, 1906-1908年, 1巻, 676p., 2巻, 439p.
- (5) *Obzor russkogo i inostrannogo zakonodatel'stva o Kooperativnykh tovarishchestvakh*. 『協同組合に対するロシアと外国の立法』, レニングラート, 1906年, 346p.
- (6) *Lektsii po istorii ekonomicheskogo byta Zapadnoi Evropy. Chit. v SPb. un-te v 1908 / 09 ucheb. g.* 『西ヨーロッパ経済史講義: 1908/09学年度レニングラート大学講義録』, レニングラート, 1909年, 268p.
- , *Istoriia ekonomicheskogo byta Zapadnoi Evropy*, T. 1-2. 『西ヨーロッパ経済史』, 第8版, 1-2巻, モスクワ/レニングラート, 1931年, 1巻, 322p., 2巻, 450p.
- (7) *Piatnadsat' let kommunal'nykh finansov v Prussii : Zakon 1893 g. i ego primenenie na praktike*. 『プロイセンにおける自治体財政の15年. 1893年法とその実施』, レニングラート, 1910年, 46p.
- (8) *Mestnoe oblozhenie v inostrannykh gosudarstvakh*, Ch. 1-2. 『諸外国の自治体税』, 1-2巻, レニングラート, 1911-1913年, 1巻, 335p., 2巻, 217p.
- (9) *Politicheskaia ekonomiiia : Popul kurs. Posobie dlia prokhozheniia polit. ekonomii v kommerch. uchilishchakh i dlia samoobrazovaniia*. 『政治経済学一般教程』, レニングラート, 1911年, 320p.
- , 『政治経済学. 経済学説史要覧』, 第3版, レニングラート, 1918年, 363p.
- (10) *Promyshlennost' i rabochii klass v Zapadnoi Evrope v XVI-XVIII stoletii*. 『16-18世紀の西ヨーロッパにおける工業と労働者階級』, レニングラート, 1911年.
- , 第2版, レニングラート, 1922年, 226p.
- (11) *Torgovaia politika i finansy Angrii v nachare XIXv*. 『19世紀初のイギリスの通商政策と財政』, モスクワ, 1912年, 235p.
- (12) *Kommunal'noe ovlozhenie v Germanii v ego istoricheskom razvitiu. Opyt izucheniia osnovnykh techenii v razvitiu gorodskikh finansov*. 『ドイツの自治体税の歴史的発展. 都市財政の発展の基本動向についての試論』, レニングラート, 1914年, 465p.
- (13) *Germanskii eksport i bor'ba s nim*. 『ドイツの輸出とそれとの闘争』, レニングラート, 1915年, 61p.
- (14) *Spornye voprosy organizatsii statistiki vneshnei trgovli*. 『外国貿易統計機関の係争問題』, モスクワ, 1916年, 40p.
- (15) *Budushchee nashei vneshnei trgovli*. 『わが国の将来の対外貿易』, レニングラート, 1917年, 20p.

- (16) *Osnovnye voprosy mezhdunarodnoi torgovoi politiki*, Ch. 1-2.『国際通商政策の基本的諸問題』, 1-2巻, レニングラート, 1918-1919年, 1巻, 290p., 2巻, 266p.
 —, 第3版, レニングラート, 1929年, 612p.
- (17) *Ocherki finansovoi nauki*, Ch. 1-2.『財政学概要』, 1-2巻, レニングラート, 1919-1920年, 1巻, 252p., 2巻, 187p.
- (18) *Kak zhivut krest'iane v Germanii*. 『ドイツ農民の生活』, レニングラート, 1921年, 32p.
- (19) *Denezhnoe obrashchenie v proshlom i nastoiashchem*. 『過去および現在の貨幣流通』, レニングラート, 1922年, 76p.
- (20) *Ocherk istorii russkoi promyshlennosti*. 『ロシア工業史概要』, レニングラート, 1922年, 156p.
- (21) *Mezhdunarodnye torgovye dorovory*, Ch. 1-2.『国際通商条約』, 1-2巻, レニングラート, 1922年, 1巻, 129 p., 2巻, 131p.
- (22) *Ocherk istorii russkoi torgovri*. 『ロシア商業史概要』, レニングラート, 1923年, 313p.
- (23) *Dzieje gospodarcze Europy Zachodniej*. (ロシア語版『西ヨーロッパ経済史講義』, 第2版, 1910年のポーランド語訳, ワルシャワ, 1923-1926年, 1巻, 300p., 2巻, 245p.) (訳者不明) [ワルシャワ大学図書館教示]
- (24) *Obzor mirovogo khoziaistva za vremia voiny i posle voiny i sostoianie ego k nachalu 1923 goda*. 『戦時戦後の世界経済概観および1923年初めまでの状況』, レニングラート, 1923年, 135p.
 — *Obzor mirovogo khoziaistva s nachala voiny do nachala 1925 g.* 『戦争開始から1925年初までの世界経済概観』, 第3版, レニングラート, 1925年, 246p.
- (25) *Promyshlennosti' i usloviia truda na Zapade v XIX stoletii*. 『19世紀の西ヨーロッパの工業と労働条件』, レニングラート, 1923年, 366p.
- (26) *Ocherk ekonomicheskoi istorii drevnei Gretsii*. 『古代ギリシア経済史概要』, レニングラート, 1925年, 240p.
- (27) *Istoriia russkogo narodnogo khoziaistva*, T. 1-2. 『ロシア国民経済史』, 1-2巻, モスクワ, 1925年, 1巻, 215p., 2巻, 440p.
- (28) *Russische Wirtschaftsgeschichte*, Bd. 1, Jena 1925, 458 S.
- (29) *Allgemeine Wirtschaftsgeschichte des Mittelalters und der Neuzeit*, 2 Bde., München / Berlin, 1928-1929. 1巻, 351S., 2巻, 553S.
- (30) ジョゼフ・クリッシャー著, 渡邊鼎訳, 『欧州中世経済史』, 中文館, 1934年, 409p. (ドイツ語版『一般経済史』, 第1巻本文の翻訳. 書評: 大塚久雄, 『社会経済史学』, 4巻3号, 1934年, pp.107-110)
- (31) *Storia economica del medio evo e dell'epoca moderna*. (ドイツ語版『一般経済史』のイタリア語訳, 2 vols., Firenze 1955, 787 p.) (G. Boehm 訳) [イタリア国立フィレンツェ図書館教示]; 第2版, 1964年.
- (32) *Powszechna historia gospodarcza sredniowiecza i czasow nowozytnych*. (ドイツ語版『一般経済史』のポーランド語訳, ワルシャワ, 1961年, 1巻, 392p., 2巻, 639p.) (1巻は Wladyslaw Gluchowski 訳, 2巻は Maria Borkowicz / Ryszard Winter-Rudnicki 訳) [ワルシャワ大学図書館教示]
- (33) ヨーゼフ・クーリッセル著, 伊藤榮・諸田實訳, 『ヨーロッパ中世経済史』, 1974年, 東洋経済新報社, 565p.
- (34) ヨーゼフ・クーリッセル著, 諸田實・松尾展成・柳澤治・渡辺尚・小笠原茂訳, 『ヨーロッパ近世経済

史』, 1-2巻, 1982-1983年, 東洋経済新報社, 1巻, 475p., 2巻, 311p.

(B) 論文

(1) “Zur Entwicklungsgeschichte des Kapitalzins”, in: *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 3. Folge, Bd. 18, 1899, S. 305-371; Bd. 19, 1900, S. 449-470, 593-647; Bd. 25, 1903, S. 145-192, 289-322.

(2) “Ekonomicheskoe polozhenie evpee v Zapade v srednie veka”, in: *Voskhod*. 「中世西ヨーロッパにおけるユダヤ人の経済状態」, 『日の出』, 21巻, 1901年, 9号, pp.30-50; 10号, pp.120-142.

(3) “Khlebnaia trgovlia v Crednie veka. Ch. 1”, in: *Narodnoe khoz-vo*. 「中世の穀物貿易」, 第1部, 『国民経済』, 1901年, 第3冊(3月), pp.1-21.

(4) “Ocherki iz ekonomicheskoi istorii Zapadnoi Evropy XVI-XVIII stoletia”, in: *Narodnoe khoz-vo*. 「16-18世紀西ヨーロッパ経済史概要」, 『国民経済』, 1905年, 第2冊, pp.43-85.

(5) “Die Ursachen des Übergangs von der Handarbeit zur maschinellen Betriebsweise um die Wende des 18. und in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts”, in: *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich*, Bd. 30, 1906, S. 31-80.

(6) “Warenhändler und Geldausleiher im Mittelalter”, in: *Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung. Organ der Gesellschaft österreichischer Volkswirte*, Bd. 17, 1908, S. 29-71, 201-254.

(7) “Ekonomicheskaia istoriia kak nauka i periody v khoziaistvennom razvitii n arodov”, in: *Russkaia mysl'*. 「科学としての経済史と国民経済発展の諸時期」, 『ロシア思想』, 1908年, 第77冊, pp.53-79.

(8) “O priiskanii sredstv na pokrytie rashodov mestnykh soiuzov na obshchestvennoe prizrenie”, in: *Trudy Pervogo s'ezada russkikh deiatelei po obshchestvennomu i chastnomu prizreniiu, 8-13 marta 1910g.* 「共同的扶養の地方連合の費用支弁資金の調達について」, 『1910年3月8-13日の共同的・私的扶養についての第1回全ロシア活動家会議報告書』, レニングラート, 1910年, pp.187-195.

(9) “Torgovoe moreplavanie i mery ego razvitiia”, in: *Kommercheskaia shkola i zhizn'*. 「通商航海とその発展の程度」, 『商業学校と生活』, 1913年, No. 2, pp.43-50.

(10) “Promyshlennye vystavki i ikh ekonomicheskoe znachenie”, in: *Kommercheskaia shkola i zhizn'*. 「工業博覧会とその経済的意義」, 『商業学校と生活』, 1913/14年, No. 1/4, pp.77-90.

(11) “Germanskii eksport i bor'bas nim”, in: *Vestnik finansov promyshlennosti i trgovli*. 「ドイツの輸出およびそれとの闘争」, 『金融・工業・商業報知』, レニングラート, 1915年, No. 5, 7, 14, 合わせて, 61p.

(12) “Statistika fabrichno-zavodskogo proizvodstva i ee zadachi”, in: *Kommercheskaia shkola i zhizn'*. 「工業生産統計とその任務」, 『商業学校と生活』, 1916年, No. 4/15, pp.15-49.

(13) “Voprosy istorii russkoi promyshlennosti i promyshlennogo truda (v doreformennoe vremya), postanovka ikh v nashei istoricheskoi literature”, in: *Arkhiv istorii truda v Rossii*. 「改革前ロシア工業・工業労働史の諸問題。我が国の歴史文献におけるその設定」, 『ロシア労働史アルヒーフ』, 第1冊, 1921年, pp.11-33. [有馬達郎教授教示]

(14) “Popytka reglamentirovat trud v nashei kustarnoi promyshlennosti”, in: *Arkhiv istorii truda v Rossii*. 「我が国クスター工業における労働の法的規制の試み」, 『ロシア労働史アルヒーフ』, 第4冊, 1922年, pp.3-13. [有馬教授]

(15)“Nashi finansy v 1918–1920 gg”, in: *Ekonomist*. 「1918–1920年の我が国の財政」, 『エコノミスト』, 1922年, 4–5号, pp.76–112. [有馬教授]

(16)“Iz istorii krestyanskogo truda v drebnei Rusii”, in: *Arkhir istorii truda v Rossii*. 「古代ルーシにおける農民労働史より」, 『ロシア労働史アルヒーフ』, 第10冊, 1923年, pp.94–126. [有馬教授]

(17)“Russlands Annäherung an Deutschland”, in: *Weg zum Osten*, Bd. 2, Berlin 1923, S. 1–4. [ページ数はベルリン・フンボルト大学図書館教示]

(18)“Iz istorii promyshlennogo truda v Moskovskom gosudarstve 16–17 st”, in: *Trud v Rossii*. 「16–17世紀のモスクワ国家における工業労働史より」, 『ロシアの労働』, 第2冊, 1924年, pp.73–92. [有馬教授]

(19)“Nesvobodnoe sostoianie krestyan i odin iz priznakov ego — yuridicheskoe i fakticheskoe prekrashchenie perekhoda v 16–17 st”, in: *Arkhir istorii truda v Rossii*. 「農民の不自由状態とその一指標——16–17世紀における法的および事実上の移動禁止」, 『ロシア労働史アルヒーフ』, 第11–12冊, 1924年, pp.178–204. [有馬教授]

(20)“Evrei v prusskoi shelkoboii promyshlennosti XVIII veka — Po dokumentam, izdannym Prusskoi akademiei nauk”, in: *Yevrejskaja starina*. 「18世紀のプロイセン絹工業におけるユダヤ人——プロイセン科学アカデミー刊行の資料による」, 『ユダヤの昔』, 11巻, 1924年, pp.129–161.

(21)“Meistbegünstigungen in den Handelsverträgen im Wandel der Zeit”, in: *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, Bd. 89, 1929, S. 540–573.

(22)“La grande industrie aux XVIIe et XVIIIe siècles : France, Allemagne, Russie”, in: *Annales d’histoire économique et sociale*, T. 3, 1931, pp. 11–46.

(23)“Die kapitalistischen Unternehmer in Russland (insbesondere die Bauern als Unternehmer) in den Anfangsstadien des Kapitalismus”, in: *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 65, 1931, S. 309–355.

(24)“Fairs”, in: Edwin R. A. Seligmann (ed.), *Encyclopaedia of Social Sciences*, Vol. 6, New York 1931, pp. 58–64.

(25)“Les traites de commerce et la clause de la nation la plus favorisée du XVIe au XVIIIe siècle”, in: *Revue d’histoire moderne*, 1931, T. 6, pp. 3–29.

(26)“Die Leibeigenschaft in Russland und die Agrarverfassung Preußens im 18. Jahrhundert. Eine vergleichende Studie”, in: *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 3. Folge, Bd. 82, 1932, S. 1–62.

(27)“Das Aufkommen der landwirtschaftlichen Maschinen um die Wende des 18. und in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts”, in: *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 3. Folge, Bd. 84, 1933, S. 321–368.

(28)“Izobretenie vazneishikh sel’skhoziaistvennykh mashin v Angrii i Soedinennykh Statak v period promyshlennogo perevorota”, in: *Trudy Instituta Istorii Nauki i Techniki*. 「産業革命期のイギリスとアメリカ合衆国における最重要農業機械の発明」, 『科学・技術史研究所紀要』, 1933, Ser. 1, Vol. 1, pp.133–157.

(29)“Die Vorgänger der Russischen Staatsbank” and “Bibliographie de l’histoire bancaire en Russe jusqu’en 1815”, in: Johannes Gerald van Dillen (ed.), *History of the Principal Public Banks*, The Hague 1934, pp. 343–352, 478–480.

(C) その他

(1) Biukher, K., *Vozniknovenie narodnogo khoziaistva*. ビュヘル, カ (=カルル・ビューヒャー), 『国民経済の成立』(1906年第5版の翻訳 [訳者不明], レニングラード, 1907年, 206ページ) への序文.

レニングラート大学に経済学部が創設されたのは、1939年であった。ヨーゼフはそれ以前の法学部の経済学関係教員として、広範多岐なテーマで講義したのであろう。それを踏まえて、彼は実に幅広い主題の著書・論文を、しかも、超人的に大量に執筆したのであった。もちろん、本節に示した著作目録は完全でない。ロシアの代表的な3図書館の回答に基づくので、著書はほぼ網羅されているであろうが、論文について不完全である。次節で紹介する追悼文において、トーニーは、ヨーゼフが200編以上の論文を執筆した、と書いているが、私は僅かに29編を追跡できたにすぎない。

(Ⅲ) ヨーゼフの生涯

本節はヨーゼフの経歴についての資料を、次節は彼の家族のそれを提示する。

ヨーゼフ死去の数年後に出版された『ソヴィエト大百科事典』、第35巻は、458ページに「クリシェール、ヨシフ・ミハイロヴィチ（1878-1934）」の項目を載せている。それを要約してみる。彼はブルジョア経済学者、経済史家である。彼の著作は主として通商政策と租税の問題に捧げられた。さまざまな時代と地域に関して彼は著述した。『資本利子の発達』、1906-1908年；『16-18世紀の西ヨーロッパにおける工業と労働者階級』、レニングラート、1911年；『西ヨーロッパ経済史』、2巻、第8版、モスクワ/レニングラート、1931年（英語、ドイツ語、日本語に翻訳）；『ロシア経済史』、2巻、モスクワ、1925年；『古代ギリシア経済史概要』、レニングラート、1925年；『ロシア商業史』、レニングラート、1923年などである。これらは、事実資料の貴重な研究であるが、必ずしも原資料を自ら調査したものではない。革命後のヨーゼフは自分の見解を部分的にマルクス主義に順応させようとしたが、その試みは筋が通っていない^①。

私はヨーゼフの職歴に関してレニングラート大学図書館に質問した。同図書館は1985年6月と10月に次のように回答してくれた。レニングラート大学教授であったヨーゼフは、1878年8月1日にキエフで生まれ、1934年に没した。彼は1900年にレニングラート大学法学部を修了し、05年から32年までこの大学の法学部に勤務した。すなわち、05年から私講師、18年から正講師、19年から教授（政治経済学講座）であり、21-24年には大学付属経済研究所の所長を兼ねた。彼は「13-18世紀西ヨーロッパ工業形態史概要」によって1908年に政治経済学修士となり、「ドイツの自治体税とその展開」によって15年に政治経済学・統計学博士となった。ヨーゼフの没地、死亡月日、死因は不明である。さらに、1986年6月のソ連閣僚会議付属文書総局の手紙に添付された、日付なしの国立レニングラート文書館の回答（GIALO, f.14, op. 3, d.14350に基づく）によれば、ヨーゼフは政治経済学修士号をレニングラート大学から、政治経済学・統計学博士号をモスクワ大学から授与された。

ワシントン大学図書館のバーナム夫人は二つの追悼文を見つけだし、私に教えてくれた。第1はイギリスの雑誌、『エコノミック・ジャーナル』、44巻、156-157ページに出た。その筆者Tは、『エコノミック・ジャーナル索引』、44ページによれば、あのリチャード・ヘンリー・トーニーである。トーニーは次のように書いている。ロシアの著名な経済史家ヨーゼフ・クーリッセルが1933年11月17日に亡くなった。55歳であった。彼はレニングラート大学で、一時はドイツで学んだ。彼の最初期の論文（1899-1902年）はドイツの2雑誌に発表された。レニングラート大学に戻って、彼は西ヨーロッパ経済史をロシアで初めて講義した。その講義録は1909年に出版

され、ロシアで最も流布した経済書の一つとなった。それは版を重ね、最新版は31年の第8版である。それはポーランド語、日本語、ドイツ語に翻訳された。彼の著書『資本利子の発達』、2巻は06-08年に出版された。次いで彼は、当時議論されていた自治体税の諸問題に関心を寄せ、『諸外国の自治体税』、2巻を11-13年に、『ドイツ自治体税史』を14年に出版した。後者はこの問題に関する最良の著作の一つと見なされている。ロシア革命後、彼は研究範囲を広げ、『財政学概要』、2巻、『世界経済概観』、『ロシア商業史』、『国際通商政策の基本的諸問題』、『古代ギリシャ経済史概要』、『ロシア経済史』、2巻を25年までに著した。最後者もドイツ語に翻訳された。彼は、最後の2年間は重い病気のためにベッドに縛り付けられながら、技術史を研究し、数編の論文を完成させた。私がここに記した目録も、彼の著書の一部にすぎない。彼がロシアと外国の多くの雑誌に出した論文は、200編以上である。これらの巨大な学問的業績に加えて、彼は大学、理工科大学などで教えた。彼は革命の前にも後にも、課税、外国貿易などの問題で政府からしばしば意見を求められた。彼は多くの教え子たちの研究を指導した。彼の活動は実に驚嘆すべきものであった。その秘密は、驚くべき記憶力と広範な学識を別にして、彼の絶え間のない勤勉さであった。しかし、労働と科学に熱狂する彼を、死が遂に打ち負かした。彼は多くの未完の著作を残して、亡くなった⁽²⁾。

さらに、フランスの雑誌、『レヴェュ・イストリク』も173巻、270-271ページに追悼文を載せた。その筆者はウラディーミル・トゥベルドフ・レーボフ⁽³⁾であった。以下がその要約である。ヨーゼフ・クーリッセルは長く厳しい病気の後、1933年11月17日にレニングラートで死去した。彼は、才能ある文筆家〔ミハエル〕の長男として1878年に生まれ、レニングラート大学とドイツで経済史を学び、最初の論文をドイツの雑誌、『国民経済学・統計学年報』に99年に発表した。彼はレニングラート大学で初めて西ヨーロッパ経済史を講義した。その講義録は1909年に出版され、何度も改訂された。そして、ポーランド語、日本語、ドイツ語に訳された。工業形態史、資本利子、自治体税、直接税と財政、外国貿易、西ヨーロッパの工業と労働者、ロシア経済史、古代ギリシャ経済史などに関する彼の学問的業績のすべてを、短いこの文章に列挙することは、不可能である。近年は病気に冒されていたが、彼は技術史を深く研究した。そして、18世紀の農業機械の歴史に関する論文を1933年に〔ドイツの雑誌〕『国民経済学・統計学年報』に発表した。この論文は、疲れを知らぬ彼が西ヨーロッパの学問にもたらした、最後の寄与である。彼はロシアと外国の多くの百科事典の共同執筆者であり、ドイツの『社会科学・社会政策アルヒーフ』、フランスの『社会経済史年報』と『近代現代史評論』の共同執筆者であった。彼はいくつもの高等教育機関で教え、革命前には「自由経済協会」の会員であり、革命後にはレニングラート大学経済研究所の所長であった。彼の献身、価値の高い学問的業績、広範な学識に対して彼の同僚たちは深い感嘆の念を抱いていた。彼は全存在を学問に捧げていた。指導を受けた多くの門下生、同僚、友人は彼に感謝し、夭折を哀悼するだろう。

主としてヨーゼフの研究業績に関するロシアの図書館と私との質疑応答は、1988年に終わった。95年になって、レニングラート大学図書館は大学新聞、『サンクト・ペテルブルク大学』、1995年第4号を送ってくれた。その第8面に掲載された、ヨーゼフの伝記を以下に要約して紹介する。筆者はエス・エム・ヴィノグラードフで、サンクト・ペテルブルク経済財政大学経済史講座専任講師である。そこにはヨーゼフの2枚の写真もあり、初めて公表、と記されている。

「イ・エム・クリシェール：生涯と業績の概要——彼の名は忘れられていた」

ヨーゼフ・クーリッセルは1878年にキエフで生まれた。彼の父M[ミハイル・] I [イグナチエヴィチ・] クリッセルは、民族学、文化史、ジャーナリズムに関心をもつ弁護士で、有名なユダヤ人運動活動家であった。

1896年にヨーゼフはレニングラートのギムナジウムを首席で卒業し、レニングラート大学法学部に入学した。当時ここでは、著名な経済学者たちが政治経済学、統計学、財政法その他を担当していた。学生ヨーゼフは経済学に熱中し、彼の論文「資本利子」は金メダルを与えられた。

1900年から彼はベルリン、ハレ、ヴィーン、ライプツィヒ⁽⁴⁾で、[ベルリン大学、グスタフ・] シュモラー、[ハレ大学、ヨハネス・] コンラート、[ヴィーン大学、カルル・テオドル・フォン・] イナマ＝シュテルネックその他の教授のもとで研究した。彼らすべては新歴史派経済学の巨匠であった。ヨーゼフは、おそらく彼らから、研究方法の特徴——経済現象への歴史的接近——を継承した。

大学在学中と卒業後にヨーゼフは多くの論文を、ドイツとロシアの雑誌に発表した。その中で最も優れたものは、約350ページの大論文「資本利子の発達」であり、ドイツの1学術雑誌に1899-1903年に掲載された。この論文への批評の中でペ・イ・ゲオルギエフスキ教授⁽⁵⁾は、すでにこの少壮学者を際立たせている特徴を見出している。すなわち、非常な博識、広範な資料の駆使、歴史研究への傾向と適性、知的好奇心、技術である。これらすべてによって、母校が誇りうる、学識豊かな経済学者として、ヨーゼフが育ちつつある、とゲオルギエフスキは結論づけた。

外国から帰ったヨーゼフは、05年にレニングラート大学法学部の政治経済学講座の私講師に採用され、経済史の講義を始めた。その教案はゲオルギエフスキとイ・イ・カウフマン⁽⁶⁾の承認を受けていた。06-08年に、ヨーゼフの初期の作品の中で最も重要なものが発表された。『資本利子の発達』、2巻である。以前のドイツ語論文がその基礎となっている。エム・イ・ツガン＝バラノフスキ⁽⁷⁾、ゲオルギエフスキなどはこの著作の理論的部分を批判すると同時に、歴史・経済的な部分を高く評価した。そこでは商業と工業の歴史についての広範な資料が総括されていた。

08年にヨーゼフは論文「西ヨーロッパ工業形態史概要」によって修士の審査を通過した。公式反対討論者はゲオルギエフスキとツガン＝バラノフスキであった。ヨーゼフの歴史・経済学者としての才能は、09年の『西ヨーロッパ経済史』、2巻において明らかである。この線上で彼は死ぬまで仕事を続けた。彼はそれを絶えず拡充し、補足した（最後は第8版）。この本では、中世初期から19世紀末までの西ヨーロッパの経済生活の発展の全側面が研究された。非常に厳密な批判でさえ、これほど多くの事実に基づくデータと文献を総括し、これほど広い範囲の主題、年代、地域を扱った労作は、ロシアにも外国にもない、と認めた。ツガン＝バラノフスキによれば、この著書によって経済史家ヨーゼフは、ロシアの経済学者の中で最も優れた者の一人となった。権威ある学者からの批判にもかかわらず、ヨーゼフは自分の理論的見解を放棄せず、11年の政治経済学教科書で彼の見解を簡潔に論述した。

西ヨーロッパ経済史の研究は、国家の経済政策の発展の研究の必要をヨーゼフに感じさせた。しかも、関心は貿易政策史と財政史の2点に集中した。このテーマは彼のその後の研究の独立の分野になった。彼は、外国旅行の際に集めた資料を基礎にして、11-13年に『諸外国の自治体税』、2巻を公刊した。15年に彼はモスクワ大学で、論文「ドイツの自治体税の歴史的発展」によって博士の審査に合格した。彼はさらに、貿易統計、工場生産統計に関して著作を発表した。

09-12年にヨーゼフは「自由経済協会」の会員であり、その第3部の議長であった。彼は、貿易省で株式法・

協同組合法の起草に参加し、所得税の実施、捕獲税の改正などに関する、大蔵省の委員会に参加した。彼はレニングラート大学で講義したばかりでなく、その他に、10年から高等商業講座（後の商業研究院）で講義をし、16年にその教授になった。15年に彼は心理神経学研究院の教授に選ばれた。

この活発な学問的、教育的、社会的活動の時期は17年の事件〔ロシア革命〕によって中断された。全ロシアの運命と同じように、ヨーゼフの生涯にも新しい段階が始まった。

革命は彼の生活をさまざまに変えた。18年初めにヨーゼフはレニングラート大学の政治経済学・統計学講座の正講師となり、同年末には教授となった。しかし、翌19年はヨーゼフにとって幸福な年ではなかった。飢饉、寒気と病気が彼に襲いかかった。それに加えて、赤色テロ機関が作動した。19年11月に父のミハイルが亡くなり、同年12月にヨーゼフはチェカー〔?〕の命令で拘束された。大学は彼の解放を請願した。困難な状況にもかかわらず、彼は一連の大作、とりわけ18-19年に『国際通商政策』、2巻を、19-20年に『財政学概要』、2巻を執筆した。彼は〔レニングラート〕大学と国民経済研究院（かつての商業研究院）での仕事を継続し、戦時学校と軍隊で講義した。

ネップへの過渡期になり、生活条件は改善し始めた。大学付属の経済研究所が21年に組織された。それは、政治経済学と財政学の二つの部門に分かれていた。この研究所の有力なメンバーはヴェ・ヴェ・スヴャトロフスキイ⁽⁸⁾、エリ・イ・ブコヴェツキイ、ア・ユ・フィン＝エノタエフスキイ、エム・イ・ボゴレポフ⁽⁹⁾、ヴェ・エヌ・トゥベルドフレーポフなどであった。しかし、研究所は24年に閉鎖された。さらに、ヨーゼフは国民経済研究院のレニングラート支部で仕事をし、そこの租税委員会で議長となった。また、北西地方商業会議所の顧問をつとめ、地方財政改革の準備に参加した。20年代にヨーゼフは、租税政策、外国の経済状況について数多くの論文を発表した。彼は、〔ロシアの〕有名な雑誌『エコノミスト』の編集委員だった。ペ・デ・ブルツクス⁽¹⁰⁾、ペ・ア・ソロクヌイ⁽¹¹⁾、ヴェ・エム・シテインとともに、彼はそこに論文を掲載した。この時期の著作は夥しい。とりわけヨーゼフはロシア経済史の研究に着手し、22年に『ロシア工業史概要』を、23年に『ロシア商業史概要』を発表した。ついに25年に、ソ連とドイツで同時に、キエフ・ルーシ〔9世紀〕から17世紀までの経済生活の発展を対象とする『ロシア国民経済史』、2巻が刊行された。この著作の主要な特徴は、著者がロシア経済史を西ヨーロッパ経済史と対比して考察し、共通点と差異を区別していることである。批評家たちによれば、この書物は外国の読者にとって真の啓示となった。

28-29年にドイツで『一般経済史』、2巻が発表された。これは、『西ヨーロッパ経済史』のドイツ語版である。この本はドイツ、イギリス、合衆国、フランス、イタリア、ポーランドの主要な学術雑誌に数多くの反応を引き起こした。M〔マルク・〕ブロック、A〔アルフォンス・〕ドブシュ、A〔アンリ・〕ピレンヌのような歴史家がそれを高く評価した。それは版を重ね、英語、イタリア語、ポーランド語、その他の言語に翻訳された。この作品は今でも西ヨーロッパで、名誉ある評価を受けている。傑出したフランスの歴史家F〔フェルナン・〕ブローデルは、この書物が優れた指針であり、総括的な著作の中で最も信頼すべきものである、と見なしている。私見によれば、ブローデルの周到な研究、『物質文明、経済、資本主義：15-18世紀』における諸概念、諸定式は、ヨーゼフの『西ヨーロッパ経済史』を貫く理念を明白に継承している。

大学と国民経済研究院での仕事を続けながら、20年代のヨーゼフは、戦時経済アカデミー、農業研究院、森林工学アカデミー、政治工学研究院の教授であった。政治工学研究院の経済学部を基礎にして、30年にレニングラート財政・経済研究院が組織されると、ヨーゼフはその教授となり、政治経済学講座の主任となった。

ヨーゼフの業績は西ヨーロッパで高い評価を得たが、祖国では彼の頭上に暗雲が立ちこめた。20年代の末から30年代の初頭にソ連の歴史学でマルクス・レーニン主義の方法が確立した。それに関連して、「ブルジョアの」な学者に対する批判が高まった。ヨーゼフはすでに以前からその仲間に入れられていた。批判は学問的なものにとどまらなかった。29-31年に「アカデミー事件」が捏造され、多数の有名な学者たちが犠牲になった。以前からヨーゼフは彼らの多くと学問的関係を持っていた。このような危機的な状況で31年に、『西ヨーロッパ経済史』の最後の第8版が出版された。そこでは若干の箇所がマルクス主義的に修正された。しかし、著者は、油断のない論難者を払い落とすことができなかった。この版にはア・プリゴジンの冗長な序文が付けられていた。この序文はヨーゼフの見解を非常にどぎつく批判した。すべての非難の核心は、著者がマルクス主義者ではない、という点に帰せられ、「典型的な折衷主義者」、「地を這うような経験主義者」、などのレッテルがヨーゼフに貼られた。

このような批判は、健康状態が急速に悪化していたヨーゼフに、心理的な影響を与えた。悲劇に満ちた、彼の人生の最後の時期は33年11月7日に終わった。彼が55歳で没した後、彼の著作は我が国で再版されず、彼の名は忘れ去られた。

ヨーゼフの学問的遺産はきわめて広範であり、経済学のさまざまな分野の専門家による全面的な検討を必要とする。しかし、ヨーゼフが、ロシアの傑出した歴史家・経済学者であり、祖国の学問、我々の町、とくにサンクト・ペテルブルク大学が誇りうる、世界的な名声を博した学者であることは、今でも断言できる。彼の全生涯はこの大学と結び付いていた。

戦後英語版『ユダヤ百科事典』、第10巻、1290ページに「クーリッシュェル家」の項目がある。そこにヨーゼフが含まれている。彼はミヒヤエルの子で、1878年に生まれ、1934年に没した。ロシアと西ヨーロッパの経済に関する重要著作をロシア語とドイツ語で書いた。ユダヤ史の分野の業績として、中世のユダヤ人の経済状態（『日の出』、1901年）、18世紀のプロイセン絹工業におけるユダヤ人（『ユダヤの昔』、1924年）がある⁽¹²⁾。

第一次大戦以前のロシア語版『ユダヤ百科事典』、第9巻、902-903ページはすでに「クリシェール、ヨシフ」の項目を含んでいる。要約する。経済学者ヨーゼフはミヒヤエルの子として1878年にキエフで生まれた。1900年にレニングラート大学法学部を卒業し、諸外国で研究した。ドイツの『国民経済学・統計学年報』に通商史と中世手工業の研究を掲載した。レニングラート大学で私講師として経済史を講義している（1911年現在、彼はロシアにおける少数のユダヤ人教授⁽¹³⁾の一人である）。貿易省で株式会社法・協同組合法の研究に参加し、適切な課税、工業課税の改正などに関する、大蔵省の委員会に参加した。ヨーゼフは「帝国自由経済協会」の会員であり、貧窮ユダヤ人学生援護協会の委員である。ロシアとヨーロッパの経済史についての多数の著書と論文をロシアと外国で発表した。中世のユダヤ人の経済状態に関する論文（『日の出』、1901年）とドイツ語論文「中世の商人と金貸」（『国民経済・社会政策・行政雑誌』、1908年）でヨーゼフは、中世の商品・貨幣取引におけるユダヤ人の役割を検討して、次の結論に到達した。すなわち、中世の商人は、イタリア商人であれハンザ商人であれイギリス商人であれ、商品の販売と貨幣貸付に同時に従事していた。この事情はユダヤ人も変わらなかった。ユダヤ人は当時唯一の高利貸では決してなかった。数パーセントの利子付き貸付は、教会の禁止にも拘らず中世では通常現象であり、商人、地主、聖職者によって広範囲に行なわれていた。

ドイツ語版『ユダヤ人名大事典』、第7巻、202ページは、ヨーゼフが1934年1月にレニングラートで没した、

と記している⁽¹⁴⁾。

ロシア語版『大百科事典』、第7版、第26巻、167-168ページ；ドイツ語版『ユダヤ事典』、第3巻、920ページ；ドイツ語版『ユダヤ人名大事典』、第3巻、549ページ；英語版『世界ユダヤ百科事典』、第6巻、486ページ；戦後ドイツ語版『ユダヤ事典』、第2版、399ページ；英語版『ソヴィエト大百科事典』、第13巻、560-561ページ；英語版『ロシア・ソヴィエト歴史百科事典』、第18巻、160-161ページはヨーゼフの生涯について、上記以上の情報を含んでいない。なお、ドイツ語版『ユダヤ百科事典』、第10巻、478ページは、ヨーゼフを存命としている⁽¹⁵⁾。

以上から、生地・生年、没地・没年を検討する。レニングラート大学図書館によれば、ヨーゼフは1878年8月1日にキエフで生まれた。1878年以外の生年を記す資料はない。出生地を記した、いくつかの資料の中で、戦後ドイツ語版『ユダヤ事典』、第2版だけは生地をレニングラートとしているけれども、これは誤りであろう。

レニングラート大学図書館の回答によれば、ヨーゼフは32年に大学を退任した。退任の理由は、追悼文2編が述べている病気であろう。『岩波西洋人名辞典』、452-453ページの1929年退職説は誤りである⁽¹⁶⁾。

没地は、それを記述したいいくつかの文献すべてに、レニングラートとされている。

死去の時期はどうか。トニーとトゥベルドフレボフの追悼文では33年11月17日没であり、ヴィノグラードフの伝記では同年同月7日没である。『社会科学大辞典』、第5巻、249ページでも33年没とされている⁽¹⁷⁾。それに対して、ドイツ語版『ユダヤ人名大事典』、第7巻は1934年1月に没、と記している。さらに、ヨーゼフの死亡時期は、ロシア語版『ソヴィエト大百科事典』、第35巻；戦後英語版『ユダヤ百科事典』、第10巻；戦後ドイツ語版『ユダヤ事典』、第2版；英語版『ソヴィエト大百科事典』、第13巻；英語版『ロシア・ソヴィエト歴史百科事典』、第18巻；レニングラート大学図書館回答では単に1934年である。したがって、私の知るかぎりでは、ドイツ語版『ユダヤ人名大事典』、第7巻が34年死亡説の最初のものである。しかも、これだけが典拠を記している。しかし、この典拠には疑問がある（本節（注14）を参照）。

このようにヨーゼフの生涯は相当程度明らかになった。しかし、経歴で不明の部分がいくつかある。一般経済史、第1巻序言でヨーゼフはゲオルク・フォン・ベーローに謝辞を述べている。ベーローは1897-1901年にマールブルク大学の、01-05年にテュービンゲンの、05-27年にフライブルクの教授であった。ベーローの在職中に、ただし、フライブルクでは14年までに、ヨーゼフが留学していたかどうか、を私は3大学に尋ねた。ヨーゼフの学生在籍記録は存在しない、と3大学文書館から1986年1月に回答があった。また、ヨーゼフの最初の論文が発表されたのは、ドイツの『国民経済学・統計学年報』であった。この雑誌の当時の編集者はハレ大学教授ヨハネス・コンラートであった。ヴィノグラードフの伝記にも、ヨーゼフが1900年からハレなどで研究した、と書かれている。私はハレ＝ヴィッテンベルク大学に問い合わせたが、1895年から1914年までにヨーゼフは在籍していない、と1986年7月に回答があった。さらに、ヴィノグラードフの伝記は、ヨーゼフが、大学を卒業してから、レニングラート大学の私講師に採用されるまでの数年間、ベルリン、ハレ、ヴィーン、ライプツィヒに留学した、と記している。ハレについては既に述べた。ライプツィヒ大学とフンボルト大学も、ヨーゼフの学籍簿が存在しないことを、2005年2-3月に通知してきた。ヴィーン大学からは回答がない。もちろん、これらの大学の学籍簿にヨーゼフが記録されていないことは、その大学でのヨーゼフの研修を完全に否定するものではな

い。1例を示すと、陸軍軍医森鷗外は1884年から88年までドイツに派遣され、最初の1年をライプツィヒ大学医学部で過ごした。これは、鷗外の留学時代の手書きノートを綿密に検討した武智 1997⁽¹⁸⁾によって立証された。しかし、ライプツィヒ大学の学籍簿は鷗外を含んでいない⁽¹⁹⁾。

ヨーゼフは一般経済史、第1巻序言に、この書物のある部分は、自分のロシア語の文章を妻アンナがドイツ語に翻訳し、それを自分がさらに修正した、と書いている。ドイツ語版ロシア経済史、第1巻序言にも、ドイツ語訳について妻に感謝する、と記されている。ヨーゼフの妻アンナがドイツ人かどうか、は不明である。

いずれにせよ、ロシアとソ連でヨーゼフを取り巻く状況は、きわめて厳しかった。帝政時代には、抑圧されたユダヤ人の一人として、彼は私講師のまま約13年間を過ごさねばならなかった。ロシア革命後に教授に昇任したけれども、ソ連は国際的に孤立していたから、彼が西ヨーロッパの学界と活発に交流することは、困難であったろう。彼は一般経済史、第1巻序言で、注の中の文献引用ページはすべてが正確であるというわけではない、なぜなら、ドイツ留学中に利用した文献で、現在の自分には参照できないものがあるからである、と述べている。ヨーゼフのこの悲しみは私に迫ってくる。国立大学教員は、日本が1973年にドイツ民主共和国（東ドイツ）と外交関係を樹立するまで、東ドイツ訪問を厳禁されていたが、東ドイツの一部であるザクセンの歴史を研究対象とする私は、その規定の適用を受けていたからである。

(注1) ヨーゼフのロシア語版西ヨーロッパ経済史は英語に翻訳されていない。ドイツ語版一般経済史もそうである。ヨーゼフの著書の戦前日本語訳はドイツ語版を底本としている。——なお、英語版『ソヴィエト大百科事典』、第13巻、560–561ページはほぼ次のように述べている。理論的に歴史学派の影響を最も強く受けたヨーゼフは、資本主義の下でのプロレタリアートの貧困化を否定し、資本主義の不可避的滅亡に関する、マルクスの革命的結論を拒絶した。『ロシア・ソヴィエト歴史百科事典』、第18巻、160ページは上記の『ソヴィエト大百科事典』ほど厳しくヨーゼフを批判してはいない。

(注2) ヨーゼフの最初期の論文（1899–1902年）がドイツの2雑誌に発表された、との記述は正確でない。本稿第2節（B）（1）にあるように、彼の最初の論文はドイツの1雑誌に5回に分けて、1899–1903年に発表された（合計227ページ）。また、『ロシア経済史』のドイツ語訳は第1巻だけが出た。なお、トニーが一般経済史をドイツの雑誌で1932年に書評したことは、本稿第1節で紹介した。しかし、トニーがヨーゼフとどのような個人的な関わりを持っていたか、は不明である。

(注3) この筆者のミドルネームはニコラエヴィチであろう。Mestnye financy, 『地方財政』, Moskva 1927の著者（1876生まれ）である。カタログ、Vol. 150, p. 406を参照。ヴィノグラードフの伝記によれば、これはレニングラート大学付属経済研究所におけるヨーゼフの同僚であった。

(注4) 本稿第2節（C）（1）に記したように、ヨーゼフは外国留学から帰国して間もなく、カルル・ビューヒャーの『国民経済の成立』のロシア語版に序文を書いている。当時ビューヒャーはライプツィヒ大学教授であった。ヨーゼフの上記序文はライプツィヒでの二人の接触を示すのではなかろうか。

(注5) 名はパーヴェル・イヴァノヴィチ（1857年生まれ）。カタログ、Vol. 54, pp. 369–370。

(注6) 名はイラリオン・イグナチエヴィチ（1848年生まれ）。カタログ、Vol. 79, p. 120。

(注7) 名はミハイル・イヴァノヴィチ（1865年生まれ）。カタログ、Vol. 150, p. 203。鍵本博訳、『英国恐慌史論』、日本評論社 1930年（ロシア語版は1894年）の著者である。

(注8) 名はウラディーミル・ウラディミロヴィチ（1871年生まれ）。カタログ、Vol. 144, p. 605–606。

(注9) ミハイル・イヴァノヴィチ・ボゴリーボフ（1879年生まれ。カタログ、Vol. 16, p. 226）であろう。

(注10) 名はボリス・ダヴィドヴィチ（1874年生まれ）。カタログ、Vol. 21, p. 90。

(注11) ピティリム・アレクサンドロヴィチ・ソロキン（1889年生まれ）であろう。カタログ、Vol. 140, p. 134。

(注12) 「クーリッシュル家」の項目全体について、典拠2編が記載されている。しかし、イスラエル国立図書館からの86年3月の回答によれば、この2編はヨーゼフではなく、彼の父祖に関してのみ記述している。

- (注13) 1987年8月のニューヨーク公共図書館回答によれば、1910年頃のロシアにユダヤ人の大学教授は一人もおらず、講師も10人に達しなかった。したがって、ユダヤ人が激しく抑圧された帝政ロシアで、ヨーゼフがレングラート大学私講師に就任したことは、稀な事例の一つであった。
- (注14) ここには典拠として *Isr. Fam-bl.* v. 11. April 1934 が掲げられている。1987年9月のバイエルン州立図書館の回答によれば、ここで略記された資料は、『イスラエル家族新聞』を意味するけれども、この週刊新聞に34年4月11日号は存在しない。野村正實教授の調査によれば、バイエルン州立図書館が収蔵する同新聞34年14号（4月5日発行）は、ハンブルク版で、15号（4月12日発行）はベルリン版である。これは大判で分厚い新聞であるが、ヨーゼフに関連する大きな記事は、両号に見出されない。
- (注15) ここでヨーゼフがレングラート大学経済史教授とされているが、誤りである。また、ヨーゼフの1908年ドイツ語論文の掲載雑誌名がかなり強引に簡略化されている。
- (注16) ここでは没年も不明とされている。
- (注17) ここで、ヨーゼフが1906年にレングラート大学の西ヨーロッパ経済史担当教授になった、と書かれているけれども、それは誤りである。また、そこに掲げられている、同職組合の歴史についての論文の著者はヨーゼフではなく、父ミヒャエルである。
- (注18) 武智 1997, pp. 6-33.
- (注19) 松尾 1998, pp. 92-93.

(IV) ヨーゼフの家族

(A) 曾祖父モーゼス

本稿第1節で述べたきっかけから、私はヨーゼフの業績と経歴の調査に取りかかったが、調査は難航した。その頃、『ブロックハウス百科事典』、第17版、第10巻、730ページに、ユージン・マイケル・クリッシャーなる項目を見つけた。それによれば、ユージン（ドイツ語ではオイゲン・ミヒャエル・クーリッセル）は、1881年にロシアで生まれ、1956年に米国で没した人口問題専門家で、46年に「ユニヴェルジテート・ワシントン」の教授となった。彼は、『行軍と移住』という、ドイツ語の書物を兄弟アレクサンダーとともに32年にベルリンとライプツィヒから出した。以上である。米国議会図書館の『カタログ』を見てみると、83巻、18-19ページに、あの書物の著者としてユージン（ロシア語でエフゲニイ）とアレクサンダー（ロシア語でアレクサンドル）が記載されており、彼らの父称（ミハイロヴィチ）はヨーゼフのそれと同じである。したがって、この3人は兄弟である可能性が高い。

私は、ワシントンという名称をもつ、米国の大学を調べた。『世界学術便覧』によれば、そのような大学はいくつもある。私はその中で、図書館の蔵書数が最大であるユニヴァーシティ・オブ・ワシントン（ワシントン州シアトル市）の附属図書館宛に1985年12月に質問状を書いた。同大学スッザルロー図書館参考部門ジョイス・バーナム夫人から回答が直ぐに届いた。回答によれば、ユージンは上記大学の教授ではなく、1946年から47年までワシントン特別区のアメリカン大学の教授であった。しかも、この手紙には資料数点のコピーが同封されており、その一つが、戦後英語版『ユダヤ百科事典』、第10巻、1289-1290ページの「クーリッセル（クリシェール）家」という項目であった。それはモーゼス以下4代6人を記述している。バーナム夫人からはその後も、本稿に関して多くの教示を得た。

調査を進める過程で、さらに以下の資料が見出された。ドイツ語版『ユダヤ事典』、第3巻、920-921ページ；英語版『世界ユダヤ百科事典』、第6巻、486ページ；戦後ドイツ語版『ユダヤ事典』、第2版、399ページ

は、ミハエルと彼の3人の息子たちの略伝を記している。ミハエルと3人の息子たち、および、ロイベンについての記述は、ロシア語版『ユダヤ百科事典』、第9巻、901-905ページ（ただし、アレクサンダーを記さず）；ドイツ語版『ユダヤ人名大事典』、第3巻、548-549ページ；同、第7巻、202ページ；ドイツ語版『ユダヤ百科事典』、第10巻、478-479ページに含まれている。さらに、英語版『ユダヤ百科事典』、第7巻、581-582ページにミハエルとロイベンの項目が、ロシア語版『大百科事典』、初版、第32巻、958ページにミハエルの項目がある。

それらに基づいて、クーリッセル家4代5人（ヨーゼフを除く）の略歴を取りまとめてみる。ヨーゼフの弟たちについては、追悼文も紹介しよう。

まず、原 1973論文と戦後英語版『ユダヤ百科事典』に依拠して、ユダヤ人（ユダヤ教徒）の大まかな人口分布とロシアの状況を見る。

世界のユダヤ人総人口は1820年代の3.2百万人から、1900年に10.6百万人に、1930年代には16.7百万人に増加した。しかし、ナチスによる大量殺戮によって1967年には13.8百万人に減少した。

11世紀末からヨーロッパの西部と中部でユダヤ人への圧迫が強まったために、ユダヤ人は、彼らに寛容であったポーランドに移住していった。しかし、プロイセン、オーストリア、ロシアの3国が1772-95年にポーランドを分割したために、ポーランド国家は消滅した。ポーランド分割の結果として、それまでユダヤ人の流入を阻んできたロシアは、世界最大のユダヤ人人口をもつ国となった。

ロシアのユダヤ人は1820年代にも1900年にも世界合計の約5割であった。1820年代と1900年の第2位はオーストリア＝ハンガリーで、ともに約2割であった。1900年の第3位は米国、約1割であり、第4位はドイツ、約5%である。

そのロシアで1881年から激しい反ユダヤ人暴動が起こり、多数のユダヤ人がロシアを脱出し、その多くは米国に向かった。この結果として1930年代には米国が、世界最大のユダヤ人人口をもつ国（約30%）となった。1930年代の第2位は、第一次世界大戦後に独立を承認されたポーランド（約19%）であり、第3位はソ連（約17%）である。ドイツの地位は第5位（約3%）に低下した。1967年になると、第1位のアメリカの地位はさらに高まった（約42%）。第2位はソ連（約19%）で、独立国家となったイスラエルが第3位（約18%）である。ドイツは上位5位に入らなくなった⁽¹⁾。

ところで、旧ポーランド領土の大部分を併合して、膨大なユダヤ人を抱え込んだ帝政ロシアは、ユダヤ人の居住を、「居留地」、「制限地域」、「定住地域」などと訳される西部辺境地域だけに許した。また、ユダヤ人は身分法上、最下等の「異族人」の一つとされた。ようやく19世紀半ばになって、ユダヤ人中の上層商人、高等教育終了者と手工業者が移動と営業の自由を認められた⁽²⁾。この厳しい居住地域制限のために、ロシア中心部に定住するユダヤ人は、19世紀末にもロシア在住ユダヤ人の6%にすぎなかった⁽³⁾。

問題のロシア系ユダヤ人クーリッセル家の祖は、モーゼス（ロシア語読みでモイセイ。生没年不明）である。彼は19世紀初めにガリツィア地方からヴォルヒニア地方（ロシア語でヴォルィニ）に移住した。モーゼスはユダヤ啓蒙主義運動（ハスカラー）の信奉者であり、農業に従事した⁽⁴⁾。

オーストリア皇帝ヨーゼフ二世は1789年に寛容勅令を發布したけれども、現実には、ドイツ文化へのユダヤ人の極端な同化政策を推進した。すなわち、ユダヤ人の自治権を廃止し、ドイツ式姓名への改名と公立学校への通学を強制した。さらに、領主の製粉所・醸造所などの賃借経営やいくつかの業種の経営が禁止されたために、ユ

ダヤ人の約三分の一が生活の糧を失った。なお、ユダヤ啓蒙主義運動は早くからガリツィアに伝わり、熱心に受け入れられていた⁽⁵⁾。

かつてはヴォルヒニアのユダヤ人にとっても、貴族の領地経営の一部を肩代わりして行なう賃借経営は、重要であった。19世紀にヴォルヒニア地方はユダヤ啓蒙主義運動の一中心地であった⁽⁶⁾。

ポーランドのユダヤ人は大部分が都市ではなく、郡部に居住していた。それに対して、ロシア帝国は19世紀初め以来、一方で、ユダヤ人に対して酒類醸造権、村落居住権、不動産取得権を制限した⁽⁷⁾。他方で、ユダヤ人農業従事者なる住民範疇が、作り出された。彼らの耕作地として、一般の農民集落から隔離されたユダヤ人農業入植地が設定され、以後、この「入植地」への移住の奨励と規制が繰り返された。19世紀末のロシアでは約1.3万世帯、7.6万人が「入植地」に居住していた。同じころユダヤ人農民の数は3.3万人であった。それはロシアのユダヤ人有業人口全体（153万人）の約2%に当たった⁽⁸⁾。

(B) 大おじロイベン

戦後英語版『ユダヤ百科事典』、第10巻、1289ページによれば、モーゼスの子、ロイベン（1828年生まれ、96年没）は医師、教団活動家であった。彼はレニングラートの医学校で学んだ後、1856年にロシアの軍医となった。政府は彼を、陸軍衛生学研修のために西ヨーロッパに派遣した。彼は衛生学の書物を著した。[イサーク・]レヴィンゾーンはロイベンの師であり、友人であった。ロイベンの『回想録』は新聞、『日の出』に掲載され、後に書物になった。これはロシア・ユダヤ人教育史についての貴重な資料である。

ロイベンに関する他の資料を見る。

英語版『ユダヤ百科事典』、第7巻、582ページは次のように述べている。医師、教育者のロイベンはドゥブノで生まれ、キエフで没した。フランスとドイツで衛生学を研究した。ロシア・ユダヤ人の教育の改善のために力を尽くし、正統派信者と対立した。

ドイツ語版『ユダヤ百科事典』、第10巻、479-480ページによれば、医師ロイベンは、レニングラート大学医学部に入学を許された、最初のユダヤ人の一人であり、また、ロシアの軍医に任用された、最初のユダヤ人の一人であった。彼は1869-76年にしばしば政府によって外国の高等教育機関に派遣され、研究した。彼の『回想録』（1896年）およびレヴィンゾーンとの往復書簡（1896年）は文化史上の価値がある⁽⁹⁾。

(C) 父ミヒャエル

戦後英語版『ユダヤ百科事典』、第10巻、1289-1290ページによれば、歴史家・民族学者・教団活動家ミヒャエル（1847年生まれ、1919年没）はモーゼスの孫である。彼の著書『イエスの生涯』は、新約聖書の物語が伝説にすぎない、と最初に主張した著作の一つである。彼はロシア語新聞、『一日』の編集に参加し、また、ロシア・ユダヤ文化振興協会、ユダヤ植民協会、ユダヤ歴史・民族学協会の委員であった。「離散」しているユダヤ人の運命は、さまざまな受け入れ国の経済状況に依存する、とミヒャエルは主張した。彼は、M[マクシム・]ヴィナヴァル⁽¹⁰⁾を指導者とするユダヤ民主グループの創設者の一人であった。同グループの見解によれば、ユダヤ人の将来はロシアにおける民主体制の成立と結びついていた。

ロシア語版『大百科事典』、初版、第32巻、958ページは次のように記している。ミハイル・イグナーチエヴィチ・クリシェール⁽¹¹⁾は社会政治評論家、未開法の研究者である。ユダヤ人の家庭に生まれ、キエフ、オデッサ、

レニングラートの大学の法学部で学び、弁護士となった。『一日』、『日の出』、『夜明け』、『曙光』など多くの新聞に執筆した。彼の学問的論文は家族、政治制度、所有の歴史を扱い、ロシア語とドイツ語のいくつかの雑誌に発表された。

英語版『ユダヤ百科事典』、第7巻、581-582ページによれば、法学者・著作者のミヒャエルはソフィエフカ村近くのユダヤ人農業定住地で生まれた。1872年にレニングラート大学を卒業した。75年にヴィーン、さらにベルリンに行った。彼の著書『イエスの生涯』は76年にライプツィヒで出版された。

ロシア語版『ユダヤ百科事典』、第9巻、903-904ページによれば、民族学者、法学者、歴史家のミハイル（＝ミヒャエル）はソフィエフカ村で生まれた。彼はロシア語新聞、『夜明け』を編集し、ユダヤ史、民族学、原始法制史に関する論文を、ロシアとドイツの新聞に執筆した。『比較民族・文化概要』（1887年）などの著書がある。歴史家としてのミヒャエルは、ユダヤ人に対する諸民族の關係に主として関心を寄せた。彼の見解によると、この關係で決定的な要因は國家の經濟的な関心である。世界に散在し祖國を喪失したユダヤ人は、彼らから引き出すことのできる利益という観点からのみ、ある国で活動することを許されてきた。中世の支配者は、領地内のユダヤ人に高利貸付を強制し、ユダヤ人の財産を取り上げ、借金を踏み倒した。ロシア政府は、ユダヤ人から最大の収入を引き出す政策を会得していた（『ユダヤの昔』、1910年所収論文「ユダヤ人のいるポーランドとユダヤ人のいないロシア」）。

ドイツ語版『ユダヤ事典』、第3巻、920-921ページの記すところでは、民族学者・歴史家ミヒャエルは、ヴォルヒニアのユダヤ人農業定住地であるソフィエフカで生まれ、レニングラートで没した。彼はユダヤ人の解放のために闘った⁽¹²⁾。

ドイツ語版『ユダヤ人名大事典』、第3巻、548-549ページによれば、法学者で文筆家のミヒャエルは、1875年からヴィーンとベルリンに住み、80年にレニングラートに帰った。同記事典の第7巻、202ページによれば、ミヒャエルの遺稿の一部は『行軍と移住』として彼の2人の子によって1932年にドイツで出版された。

戦後ドイツ語版『ユダヤ事典』、第2版、399ページによれば、民族学者・文筆家のミヒャエルは啓蒙家、同権主義者であり、ユダヤ人排斥主義と闘った。

(D) 弟ユージン

ミヒャエルには3人の息子がいた（英語版『世界ユダヤ百科事典』、第6巻、486ページ）。年齢順にヨーゼフ、ユージン、アレクサンダーである。

戦後英語版『ユダヤ百科事典』、第10巻、1290ページによれば、ユージン（1881年生まれ、1956年没）は法学者・法制史家で、ロシア革命後ドイツに移住し、ベルリン大学でロシア法を教えた。彼は次いでフランスに、さらに米国に移った。彼の著書として『移動するヨーロッパ：戦争と人口変化1917-1947年』、などがある。

ロシア語版『ユダヤ百科事典』、第9巻、901-902ページによれば、法学者エフゲニイ・ミハイロヴィチ・クリシェールはキエフで生まれた。アルコール中毒の問題を刑法の視点から研究するために、レニングラート大学は1907年に彼を外国に派遣した⁽¹³⁾。

ドイツ語版『ユダヤ事典』、第3巻、920ページは書いている。法学者ユージンは以前はレニングラートの、現在はベルリンの講師である。彼は1918-20年にウクライナで反ユダヤ暴動を抑制しようとした。

ドイツ語版『ユダヤ百科事典』、第10巻、478ページによれば、法学者ユージンはレニングラートで生まれた。

彼はレニングラート大学私講師、次いでキエフ商科大学教授となり、現在はベルリン大学のロシア法講師である。

英語版『世界ユダヤ百科事典』、第6巻、486ページによれば、ユージンはレニングラート大学の刑法教授で、後に（1933年まで）ベルリン大学のロシア法教授であった。

戦後ドイツ語版『ユダヤ事典』、第2版、399ページは、法学者・人口学者ユージンが1921-34年にベルリン大学に勤務し、パリを経て41年に米国に移った、と記している。

『ブロックハウス百科事典』、第17版、第10巻、730ページのユージンの項目については、すでに本節冒頭で言及した⁽¹⁴⁾。

『亡命者人名事典』、第2／1巻、p.673によれば、人口学者ユージン教授はキエフで生まれ、ワシントン特別市で没した。1906年にレニングラート大学法学博士、16-18年に同大学私講師、18-20年にキエフ大学教授となった。20年にドイツに亡命して、21-34年にベルリン大学外国法研究所講師となった。34年にフランスに亡命し、35-40年にパリの国立科学研究センターの研究員となった。41年に米国に亡命した。46-47年にワシントン特別区のアメリカーン大学人口問題講師、49-56年に米国議会図書館人口問題専門家となった。アレクサンダーとの共著の他に、『ヨーロッパの避難民』、ロンドン、1943年など、数冊の著書がある。

ユージンについて追悼文・伝記3編がある。

第1は『ニューヨーク・タイムズ』、1956年4月4日の追悼記事である。米国議会図書館人口問題専門家ユージンはレニングラートで生まれた。1916-18年にレニングラート大学助教授、18-20年にキエフ大学教授、21-34年にベルリンの外国経済・外国法研究所教授となった。米国では41-49年に戦略サービス局、アメリカン大学、国勢調査局、陸軍省などに勤務した。

第2の追悼文は『ヨーロッパ移住問題研究集団会報』、4巻3号、41-44ページに出た。筆者はマイケル・ルーフ⁽¹⁵⁾である。それを要約する。ユージンは初期には、ロシアの優れた法学者であったが、最近25年間には著名な人口問題専門家であり、とくに移住と戦争との相互関連の理論を追求した。彼自身の生涯がこれら二つの現象の関係を示している。彼は共産主義革命後のロシアから1920年に、ドイツから35年に、占領されたフランスから40年に逃亡したからである。彼はキエフで生まれ、16-18年にレニングラート大学法学・社会学助教授、18年にキエフ大学法学・社会学教授となった。21-35年にベルリン大学外国経済・外国法研究所の国際法教授となった。この時期に彼は人口問題の研究を開始した。兄弟のアレクサンダーとともに彼は『行軍と移住』を出版した。この書物は今では移住問題についての古典的著作となっている。ユージンは、フランスでアレクサンダーと書き始めた英語著書『移動するヨーロッパ』を、48年に出版した。上記ドイツ語著書は第一次大戦までの時期を取り扱ったが、後者の書物はそれ以後を検討した。序言によれば、ユージンは、占領されていないフランスに逃亡できた。しかし、アレクサンダーは同じことを試みたけれども、失敗して、ヴィーシー政府の収容所の一つで死んだ。

第3は、『ミルバンク記念財団四季報』、40巻2号に掲載された、A. J. ジャッフ⁽¹⁶⁾の論文「ユージン・クーリッシャーの人口理論についての覚書」中の1節「略伝」（189-191ページ）である。ユージンはキエフで生まれた。彼は1920年に赤軍から逃れてベルリンに行った。35年にヒトラーのドイツから逃れ、デンマーク経由で36年にパリに行った。41年にフランスが占領されたので、再びヒトラーを逃れて、秘かにフランスを横断し、最後は米国に行った。彼の弟「アレクサンダー」は、分界線を越えるとき、ペタン「元帥軍」の守備兵に逮捕さ

れ、収容所で死んだ。ユージンはキエフ大学の法学・社会学の、ベルリン大学の国際法の教授であった。彼はフランスと米国では国際労働機構、米国政府、私的組織のために人口問題を研究した。

以上から伝記的事実を考えると、ユージンの出生地についてレニングラート説とキエフ説がある。前者はドイツ語版『ユダヤ百科事典』、第10巻；『ニューヨーク・タイムズ』追悼記事の説であり、後者はロシア語版『ユダヤ百科辞典』、第9巻；ドイツ語版『ユダヤ人名大事典』、第3巻；『ブロックハウス百科事典』、第17版、第10巻；『亡命者人名事典』、第2／1巻；『ヨーロッパ移住問題研究集団会報』、4巻3号；『ミルバンク記念財団四季報』、40巻2号の説である。キエフ説が正しいのではなからうか。

(E) 弟アレクサンダー

戦後英語版『ユダヤ百科事典』、第10巻、1290ページによれば、アレクサンダー（1890年生まれ、1942年没）は法学者・社会学者で、ロシア革命後パリに移った。彼は自由主義的ロシア亡命者のロシア語新聞、『最新ニュース』の重要な寄稿者であった。フランスにおけるホロコーストの中で彼は命を落とした。

ドイツ語版『ユダヤ事典』、第3巻、920ページは、法学者・ジャーナリストのアレクサンダーがパリの講師であり、修正主義的シオニストである、と記している。

ドイツ語版『ユダヤ百科事典』、第10巻、478ページによれば、法学者・ジャーナリストのアレクサンダーはレニングラートで生まれ、レニングラート大学私講師となった。現在はパリのフランス＝ロシア研究所⁽¹⁷⁾の講師である。彼は『ソヴィエト国家の本質』（ベルリン、1921年）、『ディズレーリ伝』（ベルリン、1923年）などを書いた。

ドイツ語版『ユダヤ事典』、第2版、399ページによれば、行政法学者・シオニストのアレクサンダーは共産主義から逃れて、1920年からパリに住んだ。42年2月にフランスのノーの強制収容所で亡くなった⁽¹⁸⁾。

アレクサンダーの追悼文が1編ある。ニューヨークで出版されたロシア語雑誌、『新評論』、第2巻、374-375ページに掲載された。筆者はG. D. グルヴィッチ教授⁽¹⁹⁾である。

フランスの強制収容所における、A[アレクサンドル・] M[ミハイロヴィチ・] クリシェール教授の突然の死は、ロシアの学問と社会評論の将来に関心を寄せる、あらゆる人を非常に驚かせた。アレクサンダーは第一級の学者と輝かしいジャーナリストとの稀な結合であった。若い時から、その家族の伝統に従って（彼の父と2人の兄は著名な学者であった）、アレクサンダーはその天賦の才のすべてを学問研究に注ぎ込んだ。レニングラート大学卒業後、彼は[ポール・] ヴィノグラードフ教授の指導の下でオックスフォードで2年間研究し、イギリス憲法の第一級の専門家であり、熱烈なイギリス崇拜者である、という、素晴らしい名声をもって、ロシアへ帰って来た。レニングラート大学の私講師としてアレクサンダーはイギリス憲法を講義した。私は、イギリスとイギリス憲法についてのアレクサンダーとの二度の会話を思い出す。第1は、1919年の厳冬、レニングラート大学の、氷に閉ざされた国家学研究室でのことであった。第2は、1940年8月フランスの敗北の後、クレルモン＝フェランでのことであった。この全期間にわたって、アレクサンダーは、倦むことなくイギリスと大英帝国を研究し、大きな期待をイギリスにかけた。当然にも、このテーマについての彼の全著作は、アイルランド自治問題やベンジャミン・ディズレーリについてのものであれ、イギリスの4つの憲法についてのもの（全く顧みられることのなかった分野での、巨大な印象を専門家に与えた、1935年の著作）であれ、真の傑作であった。

広い知的な視野を持った学者であるアレクサンダーは、自分の研究を憲法とその歴史に限定することはなかつ

た。年とともに彼はますます社会学に熱中した。民主主義と民族移動の諸問題がとくに彼の関心を惹いた。彼は、歴史についての豊かな学殖をもって、これに関する主要な著作を発表した。この著作の第1巻は、彼の兄のE[エフゲニイ・]M[ミハイロヴィチ・]クリッセル教授 [=ユージン] との共著として、ドイツ語で出版された。第2巻は、フランス語で書かれ、戦争の前夜に印刷の準備が整っていたが、パリの占領によって出版に至らなかった。

緊張を要する学問的活動は、社会評論家としてのアレクサンダーの燦然たる才能の発揮を妨げなかった。ほとんど20年の間、アレクサンダーはパリのロシア語新聞、『最新ニュース』のために、ユニウスのペンネームで社説を書き、深い内容の学術・文化記事を、機知に富んだ形で同紙に載せた。彼は、この素晴らしい新聞の貴重な補助者であり、P. N. ミリュエコフ⁽²⁰⁾の無二の協力者であった。

アレクサンダーは死の数ヶ月前に、ニューヨークの社会科学ニュー・スクール大学⁽²¹⁾の役職に選出された。疑いなく彼はアメリカでの輝かしい学問的経歴を期待されていた。

その散漫で神経過敏な外観にもかかわらず、アレクサンダーは近隣と友人に対して稀にみる親切さ、心からの誠実さ、深い献身的な愛情をもっていた。あらゆる社会的・政治的・文学的・学問的な事柄に対する、彼の確固たる道徳的・思想的なエネルギーは、真の学者の模範たらしめている。

アレクサンダーの没地は確定されていない。兄ユージンと同じように、彼もナチス治下フランスからの脱出を試みたのであったが、彼は失敗して、ヴィーシー政府の収容所、あるいは、ベタン軍の収容所で死んだ(兄ユージンの追悼文)。その収容所はノーにあった(ドイツ語版『ユダヤ事典』)。それに対して、1986年10月のパリ大学ソ連中東欧研究所の回答によれば、アレクサンダーはパリで殺された。

ロシアの著名な文筆家ミヒャエル・クーリッセルを父とする、3兄弟の経歴をまとめてみる。彼ら3兄弟は、ユダヤ人の大学入学が厳しく制限されていたロシア帝政時代に、揃ってレニングラート大学法学部を卒業した。大学卒業後、長兄ヨーゼフはドイツ語圏に留学した。次弟ユージンもおそらく同じである。末弟アレクサンダーの留学先はイギリスであった。ロシア革命直前に3兄弟は揃って出身学部で教えていた。ヨーゼフは革命後もロシアに留まった。それに対して、革命後ユージンはドイツに、アレクサンダーはフランスに亡命した。2人の弟たちは父親の遺稿を基礎にして、『行軍と移住』をドイツで出版した。ナチスが台頭すると、34年にユージンはドイツからフランス・パリに逃れた。当時アレクサンダーもそこで活動していた。ヨーゼフが病死したのは、その直前である。フランスがナチス・ドイツに敗北すると、ユージンはそこからの脱出に成功して、米国に渡った。しかし、アレクサンダーは亡命に失敗して、亡くなった。

(注1) ユダヤ人総計に占める各国の比率は、原 1973, pp. 4, 19-20; 戦後英語版『ユダヤ百科事典』, 第13巻, pp. 889-896より計算。

(注2) 原 1973, pp. 11, 25.

(注3) 原 1973, pp. 5-6.

(注4) 戦後英語版『ユダヤ百科事典』, 第10巻, p. 1289. — 3国によるポーランド分割によって、ガリツィアはオーストリア領となり、ガリツィアの東のヴォルヒニアはロシア領となった。オーストリアの対ユダヤ人政策が余りにも抑圧的であったので、生年不明のモーゼスは19世紀初めにガリツィアからヴォルヒニアに移住したのであろう。彼は1828年(ロイベン誕生)以後にヴォルヒニアで没したはずである。しかし、ロシアについて以下に記す事情の

下では、モーゼスにとってヴォルヒニアは必ずしも安住の地ではなかったと考えられる。

- (注5) 戦後英語版『ユダヤ百科事典』, 第16巻, pp.1326-1327. さらに, ドイツ語版『ユダヤ事典』, 第2巻, S.866-871を参照。
- (注6) 戦後英語版『ユダヤ百科事典』, 第16巻, pp.206-211. —ユダヤ啓蒙主義の精神的始祖はモーゼス・メンデルスゾーン (1729-86) であった。彼は, 信仰はすべての強制から自由でなければならず, 国家と教会は分離されねばならない, と主張した。戦後英語版『ユダヤ百科事典』, 第11巻, p.1336. ユダヤ啓蒙主義者たちは言語と風習の現地同化をユダヤ人の解放の前提と考え, 生産部門 (工業・農業) への職業転換を推奨し, 宗教教育とともに普通教育を重視した。しかし, ロシアのユダヤ啓蒙主義者たちは言語と風習の現地同化に批判的であり, 民族性を維持しようとした。戦後英語版『ユダヤ百科事典』, 第7巻, pp.1433, 1447, 1449; 第14巻, pp.443-444. メンデルスゾーンはベルリンのユダヤ人絹織物製造業者イサーク・ベルンハルトの共同経営者となった。戦後英語版『ユダヤ百科事典』, 第11巻, p.1329. 本稿第2節 (B) (20) に記したように, ヨーゼフ・クーリッセルはプロイセンの絹工業とユダヤ人に関する論文を書いている。—ユダヤ啓蒙主義運動は1770年代にドイツで普及しはじめ, 次いでガリツィアに広まった。さらに, それは1820年代にロシア西部で盛んとなった。この運動をロシアで推進した人々の相当部分は, ガリツィアからの移民であり, 彼らはとくに農業に従事しようとした。戦後英語版『ユダヤ百科事典』, 第7巻, pp.1433-1434, 1439-1443, 1447; 第16巻, pp.1327-1328. 上記のようにモーゼス・クーリッセルはガリツィアからの移民であり, ヴォルヒニアで農業に従事した。—ロシアにおけるユダヤ啓蒙主義の先駆者はイサーク・レヴィンゾーン (1788-1860) であった。彼が1821/23年にガリツィアから故郷ヴォルヘニアに帰って以来, とくに1840年代以後, ヴォルヘニアはロシアのユダヤ啓蒙主義の中心となった。戦後英語版『ユダヤ百科事典』, 第7巻, pp.1445-1447; 第11巻, p.116; 第14巻, p.443; 第16巻, p.210. ロシア語新聞, 『一日』と『夜明け』, また, 「ロシア・ユダヤ文化振興協会」は1860年代に, ユダヤ啓蒙主義の普及に貢献した。戦後英語版『ユダヤ百科事典』, 第7巻, pp.1449-1450; 第14巻, pp.443-444. これらの新聞と団体にミヒヤエル・クーリッセルは関与していた。また, レヴィンゾーンはロイベン・クーリッセルの師であり, 友人であった。—1881年の反ユダヤ人暴動と, それに続く, ユダヤ人の権利の大幅制限はロシアのユダヤ啓蒙主義者を分裂させた。第1に, 旧世代は, 進歩が解放をもたらすであろう, と信じ続けた。ロシア語新聞, 『日の出』が彼らの機関紙となった。第2に, 多くの若者はツァーリ体制打倒の革命運動に走った。第3のグループは, イスラエルに移住するシオニズム運動を興した。新聞, 『夜明け』はその機関紙に変わった。戦後英語版『ユダヤ百科事典』, 第7巻, pp.1450-1451; 第14巻, pp.442, 444, 452. 新聞, 『日の出』には, ロイベンもミヒヤエルもヨーゼフも寄稿している。ミヒヤエルは新聞, 『夜明け』に寄稿し, 新聞, 『一日』を編集した。
- (注7) 原 1973, p.7. —ポーランドのユダヤ人は, 財政・司法・宗教・教育・慈善の分野において自治権を持っていた。しかし, この権利はロシアへの編入以後, 次第に削減され, 19世紀半ばまでに, ほとんど失われた。原 1973, p.16.
- (注8) 原 1973, pp.10, 12, 15より計算。—ロシア皇帝アレクサンドル一世 (在位1801-25) は, 農業植民を希望するユダヤ人に対して, 国有地を与え, 一定期間について租税を免除し, さらに, 彼らを農奴にしないことを確約した。ところが, 彼の治下に植民したユダヤ人約3千家族のうち, 1925年にも残っていた家族は, 700余りにすぎなかった。他の家族は都市に移住したのである。多くの入植者が悲惨な生活を余儀なくされた。ドイツ語版『ユダヤ事典』, 第3巻, S.808. さらに, 戦後英語版『ユダヤ百科事典』, 第2巻, p.408 (1913年のウクライナにユダヤ人の村落38と農場約7千があり, その人口は42千人であった); 第14巻, p.438 (開拓地に入植したユダヤ人は軍役を免除された) を参照。
- (注9) これとほぼ同じ内容がドイツ語版『ユダヤ人名大事典』, 第7巻, p.202に記されている。また, ロシア語版『ユダヤ百科事典』, 第9巻, pp.904-905は, 医師・教団活動家ルヴィム・モイセエヴィチ・クリシェールのいくつかの著作を記載している。
- (注10) 弁護士, 教団活動家であり, 民主派として活動し, 1919年にフランスに亡命したヴィナヴァル (1862-1926) について, 戦後英語版『ユダヤ百科事典』, 第16巻, pp.152-153を参照。
- (注11) ミヒヤエルは, イグナーチエヴィチの父称をもつから, イグナーチイ (生没年不明) の子である。ミヒヤエルはモーゼスの孫でもあるから, イグナーチイはロイベンの兄弟である。ヨーゼフの父ミヒヤエルが生まれたとき, ロイベンは19歳であった。したがって, ロイベンはイグナーチイの弟であり, ヨーゼフにとって大叔父であるかもしれない。なお, ドイツ語版『ユダヤ百科事典』, 第10巻, p.479においても, ミヒヤエルは法学者・民族学者・歴史家である。
- (注12) 英語版『世界ユダヤ百科事典』, 第6巻, p.486の記述もほぼ同じである。

- (注13) ドイツ語版『ユダヤ人名大事典』, 第3巻, p.549においても, 法学者ユージンの出生地はキエフである。
- (注14) ただし, ユージンが1946年以来ウニヴェルジテート・ワシントンの教授である, との記述は正確でない。
- (注15) 筆者マイケル・ルーフについては, 不詳である。追悼文の内容から見ると, 米国議会図書館の同僚であろう。
- (注16) これは, アブラム・J. ジャッフ (1912年生まれ) であろう。カタログ, Vol. 70, p.532によれば, 彼には次の著書などがある。 *Unemployment, retirement and pensions*, New York 1960.
- (注17) ただし, パリのフランス国立図書館の1986年6月回答によれば, 33年にパリにあったのは, フランス=ロシア研究所ではなく, スラヴ研究所であった。
- (注18) 強制収容所があったノーは, 1987年11月のニューヨーク公共図書館の回答によれば, フランス南部トゥールーズ市の南45キロにある。——ドイツ語版『ユダヤ人名大事典』, 第7巻, p.202と英語版『世界ユダヤ百科事典』, 第6巻, p.486は, アレクサンダーについて格別の事実を記していない。
- (注19) 名はゲオルギイ・ダヴィドヴィチ (1894年生まれ) である。カタログ, Vol. 61, p.605によれば, 彼は *Morale théologique et science des moeurs*, Paris 1937; *Sociology of law*, New York 1942 の著者である。
- (注20) 名はバーヴェル・ニコラエヴィチ (1859年生まれ) である。 *Histoire de Russie*, 3 vols., Paris 1932-33 の著者である。カタログ, Vol. 100, p.262.
- (注21) 黒川勝利教授の教示によれば, 社会科学ニュー・スクール大学は, ナチスによって追放された科学者を救済するために, アルヴィン・ジョンソン (1874-1971) を中心として設立された。

(V) 引用文献

(A) ロシア語

- Bol'shaia sovetskaia entsiklopediia*, 1. ed., Vol. 35, Moskva 1937. ロシア語版『ソヴィエト大百科事典』。
- Entsiklopedicheskii slovar*, Vol. 32, St-Peterburg 1895. ロシア語版『大百科事典』, 初版。
- Entsiklopedicheskii slovar*, 7. ed., Vol. 26, Moskva 1914. ロシア語版『大百科事典』, 第7版。
- Jewreiskaia Entsiklopedia*, Vol. 9, St-Peterburg 1908. ロシア語版『ユダヤ百科事典』。
- Novyi žurnal*, Vol 2, New York 1942. (G. D. Gurvich) ロシア語雑誌, 『新評論』。
- Sankt-Peterburgskii Universitet*. (S. M. Vinogradov) ロシア語新聞, 『サンクト・ペテルブルク大学』, 1995年第4号 (2月8日)。

(B) 英語・ドイツ語・フランス語

- Brockhaus-Enzyklopädie*, 17. Aufl., Bd. 10, Wiesbaden 1970. 『ブロックハウス百科事典』。
- Catalog of books represented by Library of Congress printed cards*, New York 1967. 『カタログ』。
- Economic Journal*, Vol. 44, 1934. (R. H. Tawney)
- Encyclopaedia Judaica*, Bd. 10, Berlin 1934. ドイツ語版『ユダヤ百科事典』。
- Encyclopaedia Judaica*, 16 vols., Jerusalem 1972. 戦後英語版『ユダヤ百科事典』。
- Great Soviet Encyclopedia*, Vol. 13, New York / London 1976. 英語版『ソヴィエト大百科事典』。
- Große Jüdische National-Biographie*, Bd. 3, Cernanji 1928; Bd. 7, 1936. ドイツ語版『ユダヤ人名大事典』。
- Index of Economic Journal*, Vol. 2, 1925-1939, Homewood 1961. 『エコノミック・ジャーナル索引』。
- International Biographical Dictionary of Central European Emigrés 1933-1945*, Vol. 2, Part 1, München / New York / London / Paris 1983. 『亡命者人名事典』。
- Internationale Bibliographie der Zeitschriftenliteratur, Abt. C, Bibliographie der Rezensionen*. 『雑誌掲載書評集成』。

- Jewish Encyclopedia*, Vol. 7, New York / London 1904. 英語版『ユダヤ百科事典』.
- Jüdisches Lexikon*, Bd. 2, Berlin 1928 ; Bd. 3, 1929. ドイツ語版『ユダヤ事典』.
- Kriegs- und Wanderzüge. Weltgeschichte als Völkerbewegung*, Berlin / Leipzig 1932. 『行軍と移住——民族移動としての世界史』.
- Lexikon des Judentums*, 2. Aufl., Gütersloh 1971. 戦後ドイツ語版『ユダヤ事典』.
- Library of Congress and National Union Catalog Author Lists 1942–1962*, Vol. 70, Detroit 1962. 『米国図書館統合蔵書目録』.
- Milbank Memorial Fund Quarterly*, Vol. 40/2, 1962. (A. J. Jaffe) 『ミルバンク記念財団四季報』.
- Modern Encyclopedias of Russian and Soviet History*, Vol. 18, Gulf Breeze 1980. 英語版『ロシア・ソヴィエト歴史百科事典』.
- New York Times*, 1956, April 4.
- R. E. M. P. Bulletin*, Vol. 4/3, 1956. (Michael K. Roof) 『ヨーロッパ移住問題研究集団会報』.
- Revue Historique*, T. 173, 1934. (Vladimir Tverdokhlebov)
- Universal Jewish Encyclopedia*, Vol. 6, New York, 1942. 英語版『世界ユダヤ百科事典』.
- World of Learning*. 『世界学術便覧』.

(C) 日本語文献および外国語文献の日本語表示

- 『岩波西洋人名辞典』, 岩波書店, 1956年.
- 『エコノミック・ジャーナル索引』 = *Index of Economic Journal*, 1961を見よ.
- 『カタログ』 = *Catalog of books represented by Library of Congress printed cards*, 1967を見よ.
- 『行軍と移住——民族移動としての世界史』 = *Kriegs- und Wanderzüge. Weltgeschichte als Völkerbewegung*, 1932を見よ.
- 『雑誌掲載書評集成』 = *Internationale Bibliographie der Zeitschriftenliteratur, Abt. C, Bibliographie der Rezensionen* を見よ.
- 『サンクト・ペテルブルク大学』(ロシア語新聞) = *Sankt-Peterburgskii Universitet*, 1995年第4号を見よ.
- 『社会科学大辞典』, 第5巻, 鹿島出版会, 1968年.
- 『新評論』(ロシア語雑誌) = *Novyi zurnal*, 1942を見よ.
- 『世界学術便覧』 = *World of Learning* を見よ.
- 『世界ユダヤ百科事典』(英語版) = *Universal Jewish Encyclopedia*, 1942を見よ.
- 『ソヴィエト大百科事典』(英語版) = *Great Soviet Encyclopedia*, 1976を見よ.
- 『ソヴィエト大百科事典』(ロシア語版) = *Bol'shaia sovetskaia entsiklopediia*, 1937を見よ.
- 『大百科事典』(ロシア語版), 初版 = *Entsiklopedicheskii slovar'*, 1895を見よ.
- 『大百科事典』(ロシア語版), 第7版 = *Entsiklopedicheskii slovar'*, 7.ed., 1914を見よ.
- 武智 1997 = 武智秀夫, 「ライブチャットでの衛生学研修」, 『鷗外』, 61号.
- 原 1973 = 原暉之, 「近代ロシアにおけるユダヤ人およびユダヤ人問題」, 『愛知県立大学外国語学部紀要 地域研究・関連諸科学編』, 第8号.

『ブロックハウス百科事典』= *Brockhaus-Enzyklopädie*, 1970を見よ.

『米国図書館統合蔵書目録』= *Library of Congress and National Union Catalog Author Lists 1942-1962*, 1962を見よ.

『亡命者人名事典』= *International Biographical Dictionary of Central European Emigrés 1933-1945*, 1983を見よ.

松尾 1998=松尾展成, 「ザクセンの森鷗外」, 『岡山大学経済学会雑誌』, 29巻4号.

『ミルバンク記念財団四季報』= *Milbank Memorial Fund Quarterly*, 1962を見よ.

『ユダヤ事典』(戦後ドイツ語版)= *Lexikon des Judentums*, 1971を見よ.

『ユダヤ事典』(ドイツ語版)= *Jüdisches Lexikon*, 1928; 1929を見よ.

『ユダヤ人名大事典』(ドイツ語版)= *Große Jüdische National-Biographie*, 1928; 1936を見よ.

『ユダヤ百科事典』(英語版)= *Jewish Encyclopedia*, 1904を見よ.

『ユダヤ百科事典』(戦後英語版)= *Encyclopaedia Judaica*, 1972を見よ.

『ユダヤ百科事典』(ドイツ語版)= *Encyclopaedia Judaica*, 1934を見よ.

『ユダヤ百科事典』(ロシア語版)= *Jewreiskaia Entsiklopedia*, 1908を見よ.

『ヨーロッパ移住問題研究集団会報』= *R. E. M. P. Bulletin*, 1956を見よ.

『ロシア・ソヴィエト歴史百科事典』(英語版)= *Modern Encyclopedias of Russian and Soviet History*, 1980を見よ.

Wirtschaftshistoriker Iosif Mikhailovich Kulisher
——Seine Werke, sein Leben, seine Familie——

Nobushige Matsuo

- (I) *Allgemeine Wirtschaftsgeschichte* von Josef Kulischer
- (II) I. M. Kulisher's Werke
- (III) Sein Leben
- (IV) Seine Familie
 - (A) Urgroßvater Moses (B) Großonkel Reuben (C) Vater Michael (D) Bruder Eugen
 - (E) Bruder Alexander
- (V) Zitierte Literatur